無産階級の畫家

ゲオルグ・グロッス

柳瀬正夢編著



1929
鐵塔書院

GEORGE GROSZ





無産階級の畫家

ゲオルゲ・グロッス

柳瀬正夢編著



1929

鐵塔書院

無產階級の畫家

ゲオルゲ・グロッス

序

いま、粗雜ではあるが西歐獨逸の革命的畫家、同志ゲオルゲ・グロッスの研究の書の一部を、漸く世に送ることができる。

グロッスのものを纏めることを私が約してもう五六年の時間がたつた。そのあひだに、グロッスの魅力は國境を越え海を渡つて、あらゆる國々のあらゆる美術家の中へとけこんで行つた。彼等の畫ペンの先からは世紀末的な變態美、いはゆる「グロッス型」が滲み出るやうになつた。やがてこれは我らの陣營の中までおしだしてきた。さうして私は氾濫するこの流れに多くの優秀な分子のさらはれて行くのをさへ見つつきた。資本主義一般の膿瘍を曝きさらして餘りなかつた勇猛なる彼も、今日は資本主義の癌瘇を刺す手で歷史の堤防を突き破りつゝある。運動の流れが建設期に向つてゐる現在の瞬間、正しい流れの堤防を破壞するこれらの否定的要素は濁流に浮かして運動の外へ排除せねばならない。一應は進步的役割をはたした彼

等も現在では彼等の意志に反しても早反動の役割をなしつゝあるから。私が運動の流れのためにこの「グロッス型」の分析を試みやうとあせりだしてからもう三年にならう。めまぐるしい運動の流れは容易に私にこの仕事をさせなかつた。だが全體の意志はいま私に、たまたま滿蒙の旅次の寸暇を審めさせてこれの一端をなさしめた。

私はグロッスの研究の書を大凡三つの部册に分けることをもくろんでゐる。第一のものが本書で、ここでは私の一寸した批判的な概念を織り混ぜ乍ら先づ西歐の諸家にグロッスを語らせ、そしてグロッスへの一般の輪廓的關心を喚起させやうとたくらんでおいた。第二のものではもつぱらグロッス自身の言葉によつて彼の世界觀、文明批評、藝術觀を開かうと思つてゐる。そのため本書では出來るだけグロッスの言葉の引用を避けておいた。第三のものは私のグロッスに對する嚴密な批判と分析に終りたいと思つてゐる。

以上これらの三部册を私はある目的意識性のもとに書き綴つて行きたいと思つてゐる。我々の前にいま個人の存在はさして問題でない。我々全體の効利をねら

うために一つの個は銃口の臺尻となうて對象へのモメントに役立つに過ぎない。即ちグロッスの研究がそれで、私はグロッス個人を借りてきて、我々の陣營內に肉迫してくる又は潛入してゐる、數しれない敵の小市民的要素をねらひうち、警戒しひねりつぶして終ひたいと思つてゐる。だがこいつは仲々執拗で巧妙に潛在せる敵である。

それ故グロッスの研究もこれらの素材として出來る限りこれを緻密に調べたいと思つてゐるが、無學と多忙の私にそれは期し難いと思ふ。そのうへかうした仕事は私個人のものではない。最初に出さるゝ本書の上でも種んな點で不備だらけだ。第一挿畫の蒐集がばらばらで失敗してゐる。グロッスの全貌を窺ふにはこれ以外もつともつと異面の仕事が取殘されてゐる。第二に附錄の形式で入れる豫定となつてゐた彼の仕事の年代表――畫及文による彼の著書や、雜多な形式を通して個別に發表される彼の仕事と機關と時――が私の旅行中資料の缺けてゐることと調べの甚だ困難なために後へ廻すこととなつたこと。その他いろいろ。だがこれらは

いづれ諸兄の助力を待つて逐次第二第三のものの中で追補し完全を期するつもりである。

グロッスを憶ひつつ、旅先でたまつたブルヂョア新聞を見てゐると、彼とよき對蹠をなすところのブルヂョアの使徒、藤田嗣治さんの在佛自傳記がのつかつてゐた。

グロッスと國境をはさんで佛蘭西義勇軍に志願した彼の文を私は面白く讀んだ。

ここにはどの畫家でもがかあいい幻をたのしむ藝術の都巴里での「ほがらかな貧乏」の中の「苦難と努力」と「飯のおかずにパンを食つた」生活記録が書かれ、この中にあつて一縷の望みを「一朝成功すれば一日にして城を築き、一夜にして宮殿を構へる」ことにかけて、困苦と戰ひつつ遂に「祕密のカギを握つて」「道の眞ん中でデングリ返り」「毛唐め、くやしければ貴様に出來るならやつてみろ、どうだ、出來ないだらう」と「極少しの繪具を滑らかに使つて生かした」「白と黒の心描きを試み」、この奇術の成功に小踊りした彼は「會心の笑み」をたゝへ、さてモウロウ美術家大衆にインギンに祕傳を授けて言ふやう。「畫家は例へば一錢の紙、一錢の安い布を、萬金に價するものとする、

我々は手品を畫架の上にしなければならない。」これこそ一般美術家大衆の唯一の信條であり、彼こそは彼等日本の天上雲行者のコウゴウしき先達である。
まことに勇ましくありがたきことであります。

かへりみて、我々はブルヂョアの遺物一切を精算したであらうか？否我々陣營の一部分は依然としてサロンの壁飾りの上に逡巡してゐる。そこに低迷たな引くものは工場地區の煙ではなくてブルヂョア共のシガーのくゆりなのだ。海綿のやうな無政府主義的幻想に時を過すな。地に下りよ。現實を見る方法をとれ。而して地の流れに眞實に結びつけ。そこで地上一切の相續權をもつてゐるプロレタリアートの、解放への日常鬪爭の中に正調に作品を組織せよ。ここでのみ總ては具體的作品行動のうえに辨證法的統一的に、成長するプロレタリアートの血と肉となつて解決されるであらう。

いま我々の陣營內でシヤベリ會つてゐる「內容と形式との結びつき」に於ける課題もかかる生きたる運動の流れに投入れてこそ始めて現實の問題となり得る。實際

我々は問題を常に現實の運動の流れの中に於て唯物辯證法の不分離性の中に於て解きつゝきたつたのだ。

現在の急迫せる轉形期にあつて我々はもはや取澄したモニユメンタルな形式的藝術的肉づけにうちふけつてゐることは出來ない。現在の我々にとつての生きたる緊要な具體的問題は、藝術を手段として「階級闘爭の矛盾の激化の定式」を宣傳煽動する仕事の必要である。

私はグロッスの研究によつてグロッスの古き遺骸の上に刺し開けた通風の穴から同志諸兄にこれを告げる。

またかかるのちに始めて新しくプロレタリアートの中に生きるわれわれのゲオルゲ・グロッスを見ることができやう。

私はここで兩手をのべて、さらにかたく、日本プロレタリア美術家同盟の諸兄と、同志ゲオルゲ・グロッスに握手する。

本書出版を契機に親交を結び得た私の快友小林勇は今頃私と共にグロッスの行

衛をさがしあぐねてゐることであらう。月餘に亘る監視付の病褥から漸く拔けて取急ぎ私は此の序を書添へて送る。小林兄に本稿の後れたことを重ね重ねてお詫びし、本書挿繪の製版に盡力されし鹽練鑿太郎氏に感謝する。

一九二九年一〇月二〇日金州にて　正夢

無產階級の畫家

ゲオルゲ・グロッス

柳瀬正夢著

此の書を先づ
われらが共働の闘士
親愛なる日本プロレタリア美術家同盟の
諸兄に捧げる

1.

世界は、かれ自らの、內在的矛盾のために七轉八倒身もだへてゐる。
資本主義の嘔吐
げおるげ・ぐろッす!

2.

ゲオルゲ・グロッス
――眼の澄み切つた、髭のない、いかつい顏をした、今年三十六才の獨逸人が、几帳面にカンソン紙をひろげる。さうして、キレイな手にペンを持つて――だが、その手はペンを持つてゐるのであらうか、ナイフではなからうか?――
グロッスは、ブルヂョア社會の隅々から、汚穢の總てを千切り出して、明る味に並べる。
「彼の作品には、苦しんでゐる下層階級の、人間地獄が描かれてゐる。

都市の環境は空間の機能的機械的解釋を含んでゐる。大都會の市街はさながら工業主義の荒凉たる塹ごうである。それはブルヂョアの腐れた肉で充ち溢れてゐる。大學教授と商人、登山家と將校、淫賣婦と無頼漢、學生と坊主、常習犯人と雇人、下宿のお客とオカミ、泥棒と梅毒患者、貴公子と負傷兵、實業家と人殺し。總てこれらのタイプは誰れも彼れもそれ自身一個の目的のやうに見える。妙なカツコウで町中をぶらつき歩つてゐる丈で、もう一かどの社會的使命を遂行してゐると心得てゐるらしい。此の人間の怒號と混亂の眞只中に、飾りたてた電車と衰へかけた樹木とが、迫つて來る夜のトバリとブルヂョアの衰へきつた動物共とざつぜん入り混つてゐる。一方高層建築は入り亂れた電線から嶄然頭角を現してゐる。奢侈は淫賣屋のやうな顔付で、あらあらゆる處ににやにや笑つてゐる。しかも犯罪の芽は、葬式車の上にさへ現れてゐる。彼にとつては享樂である所の事務を追つてゐる。或ひは事務である所の享樂を追つてゐるブルヂョアも、例へば彼が機械の中の一機械に過ぎないと知つた時、さすがの彼も苦しい時を持つのだ。一方梅毒患者の血は、腐れ爛れた腫物となつて、時を置いて發作を起しながら、町の灰色の動脈を絶へず經環ぐつてゐる。對象の複雜多樣な不一致に完全に適合してゐる同時性の規範は、家の內部と同樣に街頭にも現はれてゐる。其處では近代文明の混亂が支配してゐるのである。

休止と兩極性と距離の否定は文學的效果を創り出さない。それ故に、同時に肉體的であり精神的である所の平面、驚くべく突つ込んだ效果の全産物である所の平面、後から後からと現れる活動寫眞的な、彫塑的な、平面の完全な融合が極めて自然なことゝ思はれるのである。カフエーのテーブル、心境狀態、天使、頭、器具、記憶、飮酒、それらがお互に交り合してゐる。トランプの勝負が性的行爲と交り、「氣をつけ」の姿勢をとつた兵隊は頭の代りに便器を持つてゐる。皇帝ウイルヘルムは一つの寫眞の中で、その手に何か獲物を持ち、ゴテゴテに飾り立てられたマントで陰部の邊り迄やつと覆つてあらはされてゐる。同じ繪の前方には、ブクブクにふくれた淫賣婦が鼻を擴げて笑ひ、そして衆人環視の中で胸もあらはにはだけてゐる。通行人のズボンは股の處がふくれて、女のスカートといふスカートはどれもこれも透きとほつてゐる。そこは一般に激しい性的欲望のみなぎつてゐる雰圍氣である。コンポジションの中心は置き換へられてゐる。卽ち時には、カフスボタンや吹き出物だらけの首にはつたカツコウのいゝ四角な膏藥(かうやく)などに、特に力を入れて繪畫の支點を置いてゐるので、較べものにならない程痛烈な皮肉が釀されてゐる。又ある場合には、恰もわれこそ理想と責任の世界を支持する義務があると云つたやうに傲然と自負してゐるが、根本的には補助的要素や又外部的共同作因によつて決定されてゐるところの、例

へばゆがんだ口にはさまれたシガーの様なものがある。この口はといふと、徹頭徹尾フイリステン根生を集中した葉巻を飲むひとと、その運命がその煙の中に破壊され消滅せる葉巻と釣合ふやうな特別誂への口である。

人は言ふであらう。グロッスの心は彈藥箱の下に据ゑ置かれてあるのだと。四ツの壁の僞りの秘密の中でキレイになつた空氣は再びイキを吸ひ込む、すると何とも言へない恐怖がフクレた眼や腫れた手からあそこにもこゝにも現れる。併し閑寂な生活を實行した爲昂奮した神經は再び落付き、總ゆる形而上學的疑問に對する矯正策は、馬のいななきのやうな烈しい又朗らかなブルヂョアの笑ひである。チヂレツ毛の人形はその大きな尻を振つてゐる。しかるに現代の代表家達は、時は金なりと許り機械的に四角張つて杯を擧げ下げしてゐる。太い首スヂと、八ツガシラその儘の頭をしたおつかない官吏は齒ぎしりしてゐる。豆粒まなこの穢しい給仕達はその穀粒の上でバランスをとつてゐる。蓄音機は國歌を怒鳴つてゐる。」

——イタロ・タヴオラト——

膿みたゞれて騷然たる世界のすがた

「總ては焦げ、沸(たぎ)り、叱咤し、號泣し、騷ぎ、喇叭を吹き、皮笛を吹き、赤面し、汗をかき、嘔吐し、勞働」してゐる。

比較すべくもなく情緒の狂噪した中を、さやさやと牧歌的な風が通り過ぎる。

グロテスク・エロティックがくすぶつて、病的に優雅な香氣が漂ふ。

おつと待つた。どこからかつめたい憂悶の眼がのぞいてゐる。

それ片眼鏡（モノクル）を合してゐる例の肝臓病の大將さ！

ほら戰爭好きで、物眞似の素的にうまい、二十世紀の生物學的標本よ。

ほお「支配階級のツラ」が!!

3.

「グロッスの諷刺は熖の中にたち消えんとするブルヂョアの心を反映した熱烈なる鐘である。」と伊太利の美術批評家タヴォラトが、自分の文のしつぽに、かく手際のよいムスビをしてゐる。

私は此處で、一先づ西歐の諸家にグロッスの風貌を聞かう。

「彼のフリーズや繪畫的筆觸は、勇壯にして震動的であるから、礫岩の雨、鐵拳の驟雨にも似た效果を與へる。罪のない侵略と云ふ事は彼が何時も目指す軌範である。彼の心から自づと新しく汲み出さるゝ爭論的リズムは、溢る、許り豐富に出てゐる。早熟の小僧が、

共同便所の壁に春畫や政治的物語りを描いたりして、己が潛在意識を洩らして喜んでゐるやうに、又は無頼漢が監獄の壁に彼の罪狀を叙事的な文句で書きつらねて喜ぶやうに、小僧の畫家であり無頼漢の畫家である。彼ゲオルゲ・グロッスは、小兒らしい又好色文學的な畫を描いてゐる。しかしそのいづれの場合に於ても、繪畫的な善き音調から歡喜の叫びが立ちのぼつてゐる。」

——イタロ・タヴォラト——

彼の底にはさわやかなアンファンテリズムが流れてゐる。

「併し迷へる童話の中にはどこにも光がない

而も彼は一人の小兒である……」

「また彼の悲哀はディオニソス風であり

彼の憂悶は黑いシヤンペン酒である」

「しばしば色とりどりの涙が

彼の灰の眼の中で戯れる」

——エルゼ・ラスケル・シューレル——

ブルヂョアの涙降り、「天國」へのみちにぢれて消える。

「彼は子供が玩具に耽るやうに世界に耽り、この遊びに破壞の快力を伴ひ、」「粗雜に經驗的な、世界都市的な實在を表面非形而上學的に自らの中に取り入れてしまひ、又（倫理的

には全く純粋にされてゐない）塵まみれな火のやうな氣質で、紙のうえにはねかへし、吐き、或は（彼の好んで使ふ言葉でいへば）もごしてしまつて、ゲオルゲ・グロッスは劇烈な利益を得る。」

「彼は狂噪と毒液と苦汁とをもつて傾向藝術家に、卽ち自己矛盾に落るのである。といふのはつまり、藝術とは、さやうなものとして、ひとりでに命令的な、倫理的な、眞正な、また政治的なものなのである。またそれに滿足しない過熱した若々しさ、荒々しいぢれつたさをもつて、藝術によつて卽座に社會問題を解決して了はうと思ふのは、革命のために革命を行ふといふ危險にあるといふものだ――といふのは、この運動に大變美しくて、呪はれたる「藝術のための藝術」においてはじめて、たゞ焦噪的な樣子で耽溺されるものだからである。グロッスは幸に毒があるだけなのではなく若いだけなのであつて、もし彼がダイナマイトと精神との區別を、もつとよく知つてをり、その緊張力を失はず、その狂暴な精神を理性化したならば、この危險を容易に免れるであらう。」

「グロッスは本來の革命の理解からなんと隔つてゐることだらう！　また彼は、「形而上學」（抽象的譫語）と「勞働する人間の革命的理想」とのソフィスト的・修辭學的對立を、彼の槌のペンでもつて無作法に切斷して齊整するといふことを、殆ど豫測なしに好むのであ

る——！　如何なる理想の中に、かの不快な「永遠への展望」が注意されずに隱れてゐるのだらうか？　否、グロッス先生よ、君は敵手の辯駁をあまり安易に行つてゐる——この點で君は決して勤勉の理想に近づいてゐるのではなくて、特別に怠惰なまゝでゐる君自身が、形而上學の手中に於けるヘタに勞働する機械であり、またそれにとゞまるといふことを、君は他日悟るであらう。」

「しかし兎に角君は非道德家ではない。君の道德的・美學的な中性と無關心とは、常に關心を創造するやうに働いてゐる。」

「藝術の悅ばしい形式は、その陰氣な形體を醇化する。グロッスの輕蔑もまた、彼の政治的の意志に反して、彼の愛らしい惡意の、おのづから美的な意志を呼吸する。これはパラドックスである。」「とはいへ『悲しい』ゲオルゲ・グロッスは、矢はり彼の意志に反して、他を毀傷してよろこび笑つてゐる暴慢漢」、「痛ましく燃やされた小兒である。」

「どうぞ、もう少し狂信的でなく、もう少し革命的でなく、その代りに形而上學的にもつと思慮あるやうであれ！」——ミノナ——

ああめん。

かくこの忠實なるカント家の奴僕、「悲しい」倫理學的、人道主義的、形而上學者、ミノ

ナ和尙は、唾（つばき）に濡れた上眼をつかひながら、感傷的な聲をしぼつた後で呪文をとなへる。

革命的なトゲよ解けておしまい！　キレイな病毒の芽いやはえよ！

心せよグロッス。こつぴどく蹴とばせ！

封建的要素とブルヂョア的本質との末の申子、帝國主義のバケモノ一切に、荒々しく食ひつく彼のさかんなる鬪爭力（フワイテイングスピリツト）——現實的具體的樣式によるその煽動的宣傳的藝術形態の社會的意義と彼が腕の冴へ——は國際プロレタリアートの等しく認める處であるが、問題は彼の形式的方法論的態度・世界觀の分析にのこされてゐる。

彼の素材（モチーフ）となつた世相は、眞に階級的に歷史的な辯證法的な結びつきを持つてゐるのであらうか？

彼は彼の仕事が現在の瞬間において、どこからきて何處へ行くかを、歷史的運動の流れの中に把握し見極めてゐるであらうか？

同志グロッスよ、市井のめかしこんだおべつかとにぎやかなあまやかしに足並を亂すな。わが戰鬪的プロレタリアートの國際的統一的步武の中に聞える次の二人の、ニガき同志の苦言にこそ耳を！

彼はしばしばドオミエとの比較硏究をやられる。こゝでも、彼の素描にドオミエ風の魅

惑的壯大さの闕如してゐるを難じ、彼がわざと壯大さを意識せざるを歎じて言はれてゐる。「彼は自分に才氣ある表出もスタイルの記念碑性も持つてはゐないのだ。」と「そんな譯で彼は、鈍愚な嘲弄と怨恨とで勇氣づけられてゐる社會批評家に過ぎないのだ。ドオミエはこれに反して、ゲオルゲ・グロッスとは異り不德でも殘忍でもない。ドオミエはくごく語らなかつた。彼は一つの偉大な風格を持つて居り、偉大な聯絡を考へる。こんにちゲオルゲ・グロッスに才氣と偉大とがないのは、さすがに現今の社會機構に根ぶかい根據があるのだ。彼、ブルジョア的のしもべは『時代の缺陷をねらつて』ブルヂョア根性から飛び出して來たのである。彼はそこから僅か一面だけ見るのであつて、全體を、人間的なものを見ない。のみかかへつて社會の非人間的なものを見るのである。

彼が觀察し體驗する世相は、支離滅裂な社會――青ざめた精神のない、殘忍な、動きと深みに缺けた社會の姿である。」

「ゲオルゲ・グロッスはプロレタリアをも、たゞ支配階級への從屬關係と屈從關係との點から觀察するに過ぎない。彼には、生一本の階級意識ある勞働者のタイプ、事實すでに在るタイプを摑んだ素描がない。」

「彼はプロレタリアを殆ど除外し、缺かさずブルヂョアを描いてゐる。」「彼の描くところ

は、ブルヂョア社會の視角である。」

――ゲエ・ゲエ・エル・アレクサンデル――

だが彼は一定の社會的目的をもつて、獨逸勞働階級の革命的階級的現實の上に戰つてゐる。

たゞグロッスには彼の制作行動のなかに、現在の瞬間に於ける、全階級に共通するプロレタリアートの、一定問題への集中的統一的煽動意識が缺けてゐる。このことはプロレタリアートの階級鬪爭に參列するものゝ致命的傷である。いかにそれ自らが個人的に强力なる宣傳煽動の武器であつても、プロレタリア運動の現段階の一つの統一的見地から鬪爭目標を測らない場合にはそれは無力に等しい。いな彼の階級的意志にも反して效果はときに反動的でさへある。

彼が現實的苦鬪のなかに鍛へあげてきた現在の形式――まだ力は弱く小市民的殘滓は浮いてゐるが――はよろしい。だが現在の彼の內容的テーマの多くは依然としてメタンガスの低迷する世界一九二〇年の地をさまよつてゐる。老いたるグロッスが疲れもなく、不信的に、否定的要素のみをかゝへて……。

「革命は舊きものを否定するのみではなく、さらに新しきものを建設し、あるひは少くとも、新たな建設への道を指示する。否定的モメントと並んで肯定的モメントも亦存在す

る。ゲオルゲ・グロッスにはそれが無い。

プロレタリアは彼にとつては――單なる奴隷、受難者あるひは屍體であるに過ぎない。革命の緊張は――絶望あるひは狂氣の緊張である。彼の繪畫の唯一の積極的な要素はブルヂョアであり、唯一の肯定的モチーフは――このブルヂョアに對する憎惡である。併しこれは革命的プロレタリアートの見解ではなくして、單にその一面である。革命的プロレタリアートは革命の肯定的方面を見、かつ感ずる。しかしこの肯定的な、建設的な、前方に向つてゐる方向を見ないものは、單なる同情的な人道主義者に過ぎない。

かくてゲオルゲ・グロッスの藝術は、彼のすべての內面的力および彼のすべての宣傳的意義にもかゝはらず、彼がかくも勇敢に鬪爭してゐるところの社會のなかに根柢を持つてゐる。」

――イ・マーツア――

（藏原惟人・杉本良吉兩氏譯「現代歐州の藝術」より）

4.

彼の「傳記に代へて、」一應そのコシカタをも辿つておかねばなるまい。

「グロッスは、ひと昔前には、伯林市立演奏場に出て、歌つたり、變てこなダンスを踊つ

たり、樂器をなぶつたり、皮肉タツプリな科白をどなつたりして、そこの一枚看板となつてゐた。やがて彼は詩人あるひは漫畫家として伯林やミユンヘンあたりの滑稽新聞や文藝雜誌に現れ、――うんぬん。」

震災前のこと。私は亞米利加の「リベラトール誌」の中に「共産主義の藝術家ゲオルゲ・グロッス」と題したこんな紹介文を見たことがある。

次で私は一九二一年版の「ユンゲクンスト叢書」を手にして、初めて「ゲオルゲ・グロッス」の聲に接した。「傳記に代へて」がそれだ。彼はその文――彼が傳記的覺え書のかはりに書き記したそれ――の末尾に「私の生涯に起つた些々たる外面的の出來事、たとへば誕生日だとか、家系だとか、學問をしたとかせんとか、搖籃から墓場までの藝術家の地上の障壁とか、創作衝動とそれへの陶醉とか、最初の成功とか、何とかかとか、數へたてた處で、――いな、よしそれ以上のものを並べたてた處で結局つまらぬことだ。」と言つてゐる。だがまだその口のしかと乾かぬうちに――とかくのせんぎだてがうるさく、しつきりなく世間の人々に「生立について」せがまれるので――遂に彼は矛盾を避けがたく一九二五年版「ブルヂヨアの鏡(スピゼルシユビーゲル)」の序文へ彼のキライな?傳記、その「自傳的なノート」を放り込んでゐる。それは尻切れトンボにあつけない七頁のものだが、中でグロッスのドレスデ

ンの美術學校に於ける修業時代がかなりゆつたりと細かく書かれてある。そこで私は當時の「髪の短い、眼の澄んだ、おちよぼ口の、行儀正しい、勤勉な、十八才の初級生」心臟のやはらかいグロッス少年をはぐくむだ、頑でシワくちやの街ドレスデンの顏に興味を覺へた。いまドレスデンの輪郭線（アートライン）をマルセルレイの描寫に借りて先へ進むとしやう。

――「エルベの灰色の水の直ぐきわに、眠つたやうな臺地（テラス）を持つた美しい間のぬけた大きな都會。クック旅行團の漫遊者らが、貧弱な斥候隊のやうに走り廻る、この美術都市には、一つの立派な博物館がある。伊太利から傳來した奇形の敎會は、その青い圓天井（ドーム）の下にたくさん鐘がある。間延びした獨逸の方言を話し、陰鬱な敎授たちや、若い畫家や、無希望な若いピアニストたち、これらの人々に、自分らの部屋を家具つきで貸してゐる五十萬のザクソン人。これらすべての倦怠が、一方は、神經病患者たちが金を拂つて溫泉に浴してゐるロシュヰッツの丘から、他方は、人々が帽子を兩手に握つて、東の方には青いボヘミヤを望み、西の方にはノルマンディのやうに毛毬のやうな林檎畑を望むことのできるモロー元師の記念像まで、その間の河の兩岸の上にひろがつてゐる。」――

ゲオルゲ・グロッスは一八九三年七月二十六日に伯林に生れた。

――ある目論見の下で、日頃獨逸の新聞に、猶太人として書きたてられてる事を氣に病んでゐる彼が、自傳の中で「私のフタ親は普魯西人でルーテル教徒だつたのだから」と念にねんをおしてゐる。――

伯林とポンメルンで普通教育を終へた彼は、ふくよかな夢に手をさしのべて――エカキ生活の第一歩へ――十八のとし、ドレスデンの美術學校へ入つた。

彼は「ひからびたザクソン精神」に漬かり切つたこの街で、彼が一生涯持續けるところの、ねんばりづよい基礎教練、つまり彼の言ふ「蜜蜂のやうに働く獨逸のよき習慣」を得た。彼はこゝではよき職人になることより外に何の野心ももたなかつた。カビのはへたやうなアカデミックな教育法にしたがつて――こゝには、今でも殘つてゐる石膏科があつて――古代クラシックの希臘彫刻をのろのろ實物大に模寫したり、四週間もかゝつて、一人の男や女のモデルをメンミツに縱横から測つて等身大に素描したりした。この氣の抜けた七面倒な汗染みた古臭い教育法の中にあつて、ロベルト・シュタールといふ教授だけがたつた一人光つて印象派的な教育を施してゐた。この人はドレスデン畫廊に四部作を送り込んでる人で、常に好んで外光の中に働きつゝある勞働者をヘラでもつてはつきりと描破し、グロッス達を感動させてゐた。

セザンヌの死後七年、漸くフランスから力強く吹き込んで來る自由の風にじつとしてゐられなかつたグロッスは、彼自身の力で、より活潑な藝術生活を「神聖な繪畫の殿堂」のソトに得ようと動きはじめた。ドガやムンクやロートレークや、「ブルッケ」の最初の展覽會――ドレスデンに起つた表現派運動の集團――に感激したり、あらゆる展覽會へ足を運んだりした。彼は勝手に多くの仕事をしはじめた。このころ、彼は凡ての電車が交叉してゐるピルナイッシエン廣場（プラッツ）のとある玄關で、三脚に腰かけてゐることを好んだ。さうして眼の前をよぎる凡てのものを、スケッチブック一杯に描きためることを好んだ。今まで「思ひ出し」ばかりで描いてゐた彼は、こゝで初めて「見る」方法を學んだ。――彼はこゝから「形態と觀察について本質的に」最も確實な基礎を得た。――

また彼は、朝から夜中まで室に閉ぢゐて、蜂のやうな勤勉さで、前々から自信にふくらみ切つてた諷刺畫の仕事をやり初めた。篩とブラシで紙に墨を散してみたり、あらゆる作家の手法を調べたり、根限りの精力でこれらの種々な調子や樣式や技巧を實驗してみた。そのうち彼は物質上の困難にぶつつかつたので早速これを利用してみた。なほそれには文句がついてゐると都合がよかつたので、彼はついでに滑稽詩人となつた。靜な壁飾り藝術に倦きてゐた彼が、求めてゐた、「直接日々の生活に活潑な關係と影響とを與へる新聞雜

誌的な仕事」への端緒である。彼は生れて初めての謝禮を儲けた。彼は自分の行くべき道と職業とをこゝに發見した。――その頃の「滑稽新聞」や「ルスティゲン・ブレッテル」や「スポーツフモール」や「ウイッツゲル・ブレッテル」や「ウルク」などに當時の作品がのつかつてゐる。

――當時はいはゆる「畫」をまだ描き初めてゐなかつた。――

その翌年彼はドレスデンの中級を拔けて、伯林の工藝學校へ移つた。そこにはより自由な雰圍氣が彼を待つてゐた。「ヨーグルトで養はれた」校長ブルノ・パウルと、グロッスが師として選びそして彼が「物判りのよい自由な世界人」として考へたところのオルリク教授、この二人は畫家ではなかつたが、しかし建築家であり、家具の圖案師であり、裝飾家であつた。彼等は流行よりほか語らず「モダン」であることを欲した。オルリク教授のクラスへ編入されたグロッスは、彼から普魯西の奬學金を世話してもらつて、物質的生活の半ばを保證され、のびのびと自由な伯林の空氣を吸つた。オルリクは、巴里から五分間クロツキーを移入したり、職業的研究の好奇心を說いたり、美しい材料の尊敬を教へた。そこでグロッスは實用的の仕事、實用版畫、獻立表、本の表紙、廣告ビラ、毛氈などの圖案をした。彼は長い間こゝにとまつて、浪漫的な妄想をたやすく追拂ふことが出來た。

一九一三年七月のある朝グロッスは、巴里のノール停車場に下車して、ドランブル街の小さなホテルに腰を落つけた。そして一言の佛蘭西語も知らないで夏の三ケ月間、巴里の街々をほつつき歩つた。近代藝術の出生地中心地として世界のブルヂョア畫家のあこがれの首都巴里も、グロッスにとつては「大した印象も與へぬ」退屈な街で、彼自身で「こののらくらもの丶都市が多くの人々に與へたやうな仰山たらしい歡喜を私は理解しなかつた。」と言つてゐる。——が、實際には、彼はひそかにピカソやシヤガールなどの思ひ出を持歸つてゐた。——

再びオルリクのアトリエに歸つた彼は、もうこんどは戰爭と動員令の來るまで、ここにある自分のテーブルと椅子を離れなかつた。

この頃迄の彼の思想的傾向は、まだいはゆる純眞で、浪漫的で厭世的で悲觀的な個人主義者に過ぎなかつた。彼は、彼自らの狹少な才能と經驗の視野を小作しては、いよよ頑なに、いよよ暗く世を拗ねて行つた。——當時生活全體に强い憎惡で向つてゐた彼が、未發刊に終つたところの三部作、「獨逸人の醜惡」を作畫したのも此の頃のことである。——

越えて一九一四年、グロッスが二十一才の夏、かの歐州大戰が勃發した。全伯林市民は榮ある好戰的精神の薪となつて一時に燃え上つた。鬪爭形態一般を一律的に拒否すること

に馴れてゐた無政府主義的な彼も、終に止むなくこの「人殺しごつこ」を是認して勇ましき戰線にたつた。しかしながら、この普魯西兵の一兵卒は、この別世界へ踏入ることによつて、初めて現實に「恐るべき醜惡の顏」をまざまざと見た。彼はいよよ人間を嫌惡し寂寥の底にめり込んで行つた。そこで彼は畫を描くことによつてこの世界からの精神的逃避をくわだてようとした。彼は塹壕生活のなかにどんどん素描をおつぱじめた。と、この仕事は、はからずも彼の同僚のなかで歡喜を立ちのぼらせすばらしくもてはやされた。彼は初めて生活のなかに生々と己の藝術が反應したのを見てとつた。戰爭に對する懷疑のなかばに哲學をひろつたのだ。彼は小踊りしてこの「よき武器」を意識した。――彼の思想的轉向の契機はこゝに端緒をみることができる。――

彼は決然起つて世の革命的思潮を探求し初めた。あらゆる障壁が彼の前に立湮がつたが彼はもうひるまなかつた。彼は諷刺畫をもつて、君主の專制とそれに甘んじてゐる獨逸中產階級のフガイナサに、メスのやうな嗤笑を浴せかけ初めた。

一九一七年、彼はようやつと二度目の長いゲルデンの守備から罷免になつた。憎惡に滿ち懷疑のはて餘りよく働かなかつたので……。

伯林に歸つた彼は最初のダダ運動にぶつつかつた。彼はこの運動の中へ身心ともに打込

んで働いた。だがそこには彼の狙つたやうな「闘爭への組織」は微塵だになく、のみか彼等は「湯とともに子供をも流してしまう」狂へる虚無主義者に過ぎなかつた。だから彼グロッスは、この疲弊と亂脈に枯れみちた獨逸の曠野を當なく走るこの無軌道車に、いつまでも醉つぱらつた乘客ではゐられなかつた。起きなほつた彼は、理性の窓をあけて前方を見たのだ。朝あけの風は彼の頭の雲を拂つた。

かの二回に亘つた政治革命の經驗によつて、戰後苦惱と暗黒のドン底にめげ込んでゐた獨逸プロレタリアートは、一九二二年春に至つて漸くその本來の力を回復して起ちなほつた。そこから朗らかな整調な國際プロレタリア軍の車輪が響いてきた。グロッスは漸くそこに、「闘爭の組織」の結びつきをめつけた。未來へ通ずる問題のすべてがそこにあつた。グロッスは彼のまことの歡喜と力と光明がそこに積込まれてあるのをみてとつたのだ。この偉大な全體の流れに個を解かしこんだ彼は、このとき初めて、彼自身のうちにあつて今まで氣付かなかつた無數の「生活に堪へ得ない要素」のもぶれついてゐるのを發見した。彼は勇敢にこの邪魔モノを全體のためにかなぐり棄てようと努力した。こゝで彼は革命的プロレタリアートの新しき思考方法によるプロレタリア・レアリズムの形式を闘ひとつた。この革命的內容（ナカミ）に密着したプロレタリア的な形式（サヤ）によつて初めてグロッスの藝術は革命プ

ロレタリアート自身の、すなはち全體の武器となつた。現在の彼は更にこれに研をかけてなほしぶとく食っついてくる小市民的の錆を落さんと苦心してゐるやうである。

これよりさき一九一五年、ヴィーランド・ヘルツフェルデが「新青年（ディー・ノイエ・ユーゲント）」を出し、その中へグロッスの畫を挿入した。これがいはゆる「高級な」文學的本道への機關に現れた彼の最初の復製だつた。この手引によつて彼は初めて知名の美術家や文學家の仲間に入つた。越えて一九一六年、テオドル・ドイベルは彼の畫についての論文を「ワイセン・ブレッテルン」に掲げて當時二十三才の未知の素描家を世に紹介した。人々は可なり方々でグロッスとそのスタイルについて話し合ふやうになつた。そのうち——その頃すでに戰爭反對ではあつたが今日ほど政治的にはつきりしてゐなかつたところの——マリク書店から「第一（エルステ）グロッス畫集（マッペ）」が出版され、引續き一九一七年には第二の「小（クライネ）グロッス畫集（マッペ）」が出た。——これがグロッスの畫の本に纏つた最初のものだつた。——彼の名は漸く戰塵のかなたに、國境を越えて、世界の隅々へひろまつて行つた。

この頃までの彼の精神と技術のなかにはまだ多分の詩文學があつた。彼のあたまは「探偵小説と海賊や密貿易者の物語と、精神分析に關する新聞の論説と、エデキントやストリ

ンドベルヒの戯曲で」滿ちみちてゐた。かうした表現様式にかなつて、この頃の彼の技巧は纖弱で幻想的で自由畫に似てちよつとクレーの畫をおもはせた。——世に多くの追隨者を出した、いはゆる「グロッス型」は此の頃から初つたのである。——しかも、彼の畫の市場における最初の商品的魅力は實にこの型だつたのである。

だが彼は「より大なる活潑さのために」このあまつたれた纖弱なプチブル的天邪鬼（アマノヂャク）の藝術を踏み越えたゆまずに進展した。「セヴエリニ風の未來派（フユチリズム）」の中に突入するかとみると、「カルラ、チリコ風の幾何學的單化」に立寄り、また「熱病やみのやうなダダイズム」の先端で吠えたてるかと思ふと、「生活から生え出た新實在派（ノイエ・ザハリヒカイト）」に腰をおろす、變轉推移極まりなき彼である。だが彼は先にも言つたやうに最近やうやくこの沒落階級の埴輪、ヂレッタントの藝術を揚棄して、「プロレタリア・レアリズム」のなかに強く大きく力をやしない初めた。

なほ彼は本業の外に挿畫家、舞臺装置家として有名である。數多きこの仕事のなかでは、クラブンドの譯したドーデーの「タルタラン・タラスコン」やヘルツフェルデの「夜の怪奇」の挿畫、それからイヴン・ゴールの「メッザレム」やバーナード・ショウの「ナポレオ

ンと獅子」の衣裳や裝置その他のものをあげることができやう。

そのほか彼の手際のよい裝幀をときどき散見する。――別稿で私はグロッス研究家の便宜のために、彼の最近に至るまでのあらゆる仕事の出場所とその年代表を、彼に關する著作物とともに、拾ひきれる範圍でこまかく並べておいたから參考として貰ひたい。――

最後に取殘した若干の事件をつけ加へる。

つねに利害相反した世界觀で對立してゐる我々は、プロレタリアートの旗の進むところかならずやブルヂョアの血汐と虚壓の襲ひきたることを豫期してゐるゆえに、かうした事件のかづかづを、增大する我々階級の力のバロメータとして認識せねばならない。

一九一七年、ゲオルゲ・グロッスはミュンヘンから、月刊誌「新青年」を出してその主筆となつたが、後に君主の脊德を諷した石版畫を公にしたお蔭で、皇帝からの令狀が執行せられ已むなく亡命せざるを得なくなつた。この同じ年に同じ事件で時の政府からまた睨まれた。

一九一八年の初頭、それらと同じ題材を取扱つた石版畫集が「神よ共にあれ」と題して紙挾み式の體裁で再び出版せられ、それは殆ど夜通し飛ぶやうに賣れて行つたが再版の一

部は軍事當局の手に沒收せられた。

一九二三年、「此の人を見よ」なる題命のもとに、ブルヂョアヂーの性生活の描破を內容としたところの素描版畫八十四と着色版畫十六からなる尨大な石版畫集が出版せられたが政府は即日これを沒收し「不貞淑なる畫」といふ理由のもとにグロッスを告訴した。そしてその翌年の春の判決の結果は畫集中の二十二枚の畫を破棄することと、彼と出版業者を罰金刑に處することを言ひ渡した。

一九二八年、またまた畫集「ヒンターグルント」中の素描三枚が引つかかつた。これは伯林のピスカトール劇場で墺太利の作家ガシェクの反戰小說「沈默」を脚色上演したときにグロッスがこれのため一聯の素描を描きあつめてマリク書店から出版したもので、劇の失敗に反してこの畫集は墺太利の專制政治と軍國主義を骨髓まで憎惡してゐるガシェクの內容を餘りにも忠實に傳へてゐた。そのため檢事はその中から三つののつぴきならぬ繪をつまみ出したのだ。その繪は宗教と支配階級と軍國主義の緊密なる結びつきを曝き散して餘りないものであつた。例によつてグロッスと出版業者が法廷に呼びだされて繪の破棄と罰金刑を申渡された。だが越へて一九二九年四月、伯林地方裁判所で再審の結果は前審をくつがへしてめづらしくも無罪の判決が下つた。

この法廷で判事はグロッスに訊ねた。
「被告はその方の畫が、廣汎な獨逸人民をいらいらさせてゐるといふことを知つてゐるのか？」
グロッスは答へた。
「私も言はゞ獨逸人民に屬してゐるのです。そして敎會が戰時に、殺人や放火の傳導演說をやるのにいらいらさせられてゐるのです。じつさいに辱しめられてゐると感ずるのは誰でせう。私は殺人者や放火ものの感情のために不安でたまらないのです。」
こゝで私は此の文を「終了」としたい。だが「グロッスのヘルツフェルデ」のためもう少し紙面をのばさせて奐れないか。
ヴィーランド・ヘルツフェルデとは、グロッスにとつての終始一貫まことによき共働者なのである。彼は左翼文藝家であると同時に左翼出版業者である。最初グロッスを世に紹介したのも彼であり、彼の經營する「マリク書店」の出版物によつてグロッスを廣く世界に送り出したのも彼である。一九一六年以來現にグロッスの著書は殆どここから出されてゐる。一九二四年には彼によつてマリク書店の中に畫商「畫廊グロッス」さへ設置された。或ときは「藝術は危機にある」のごとく一心同體の共著者であり、檢閲制度の昆棒にグロ

ッスがけつまづけば彼が決つて力強き介添の役にあたつてゐる。

私はグロッスのこのこよなき同志ヘルツフェルデにおくがきを頼みたい。よつておしまひの事件に關する彼の法廷におけるサイレンのごとき應答をくりつけてこの書の跋に代へる。

5.

判事が前のグロッスのおどけた答辯に手を燒いて、引續いてヘルツフェルデの訊問に入つたとき、彼はこの裁判を新しい戰爭準備をしてゐる權力に對する闘爭のなかの小さいエピソードに過ぎない。とうそぶいて訊問の消點である「宗教への侮辱的行爲」なんどは問題でないとあしらひつゝヘルツフェルデは語を强めて言つた。

「問題は數百萬の人々に、新しい戰爭について警告することにある。言葉や繪で、あらゆるとき、あらゆる場所で、戰爭の危機について叫ばねばならない。そのために我々は戰ひを企てたのだ。」

「で被告はあらゆる戰爭に反對なのか？」

「否！　我々は、内亂、奴隷の抑壓者に對する戰爭、帝國主義戰爭に終結を告げる戰爭には讃成だ！」

——北滿ハルピンの旅宿にて一九二九年九月一日——

圖版目次



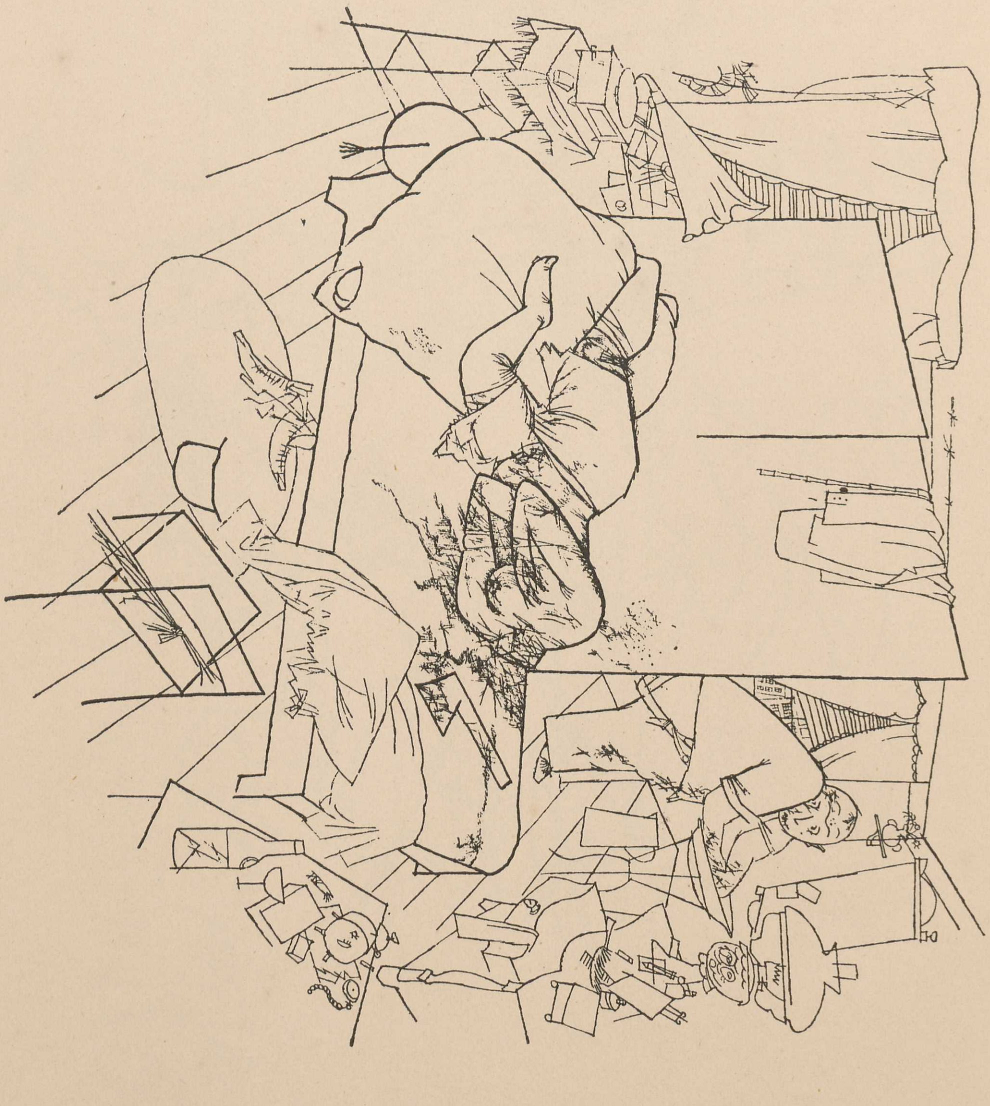


1



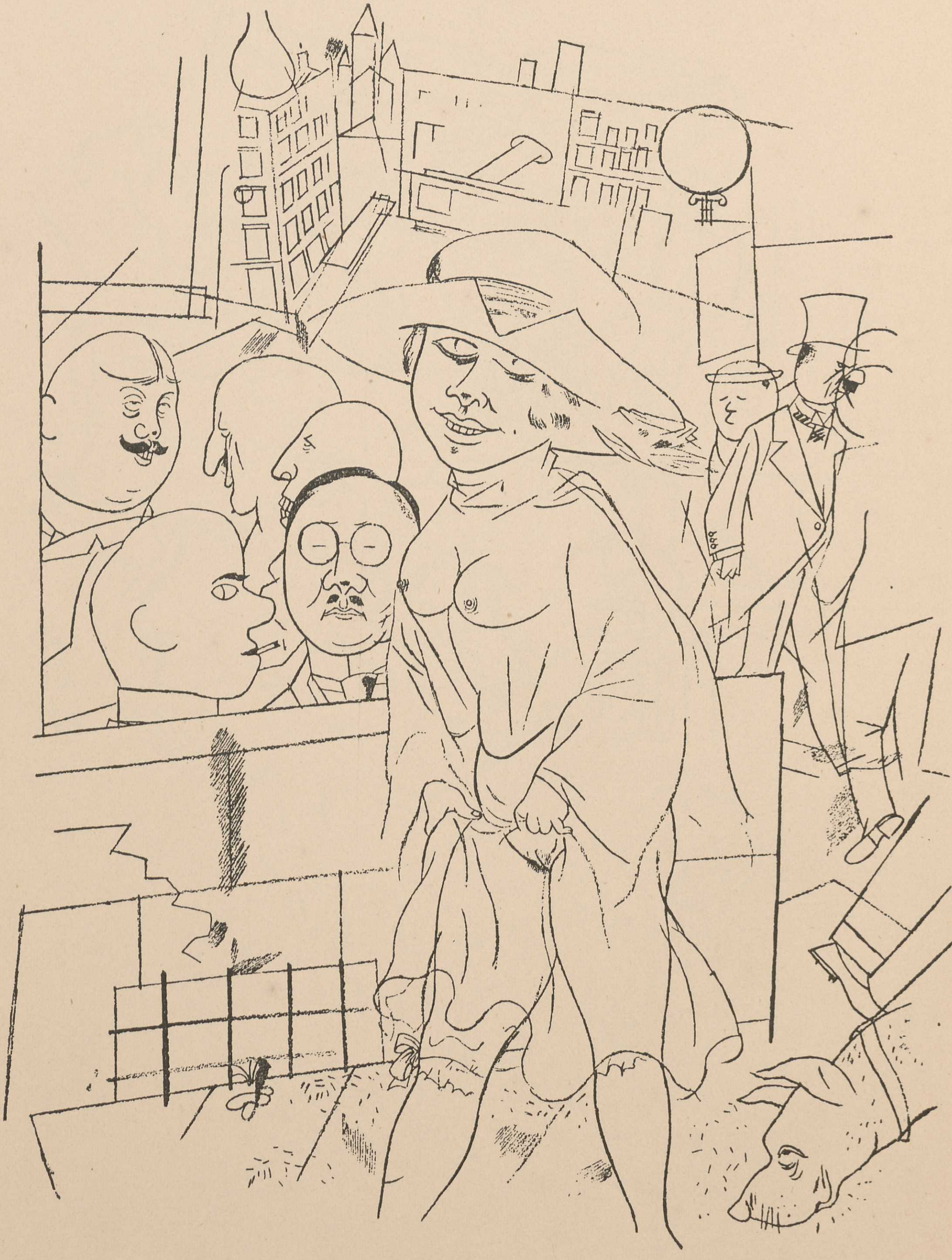
2












ROAL DIE
S.A.D
BIER





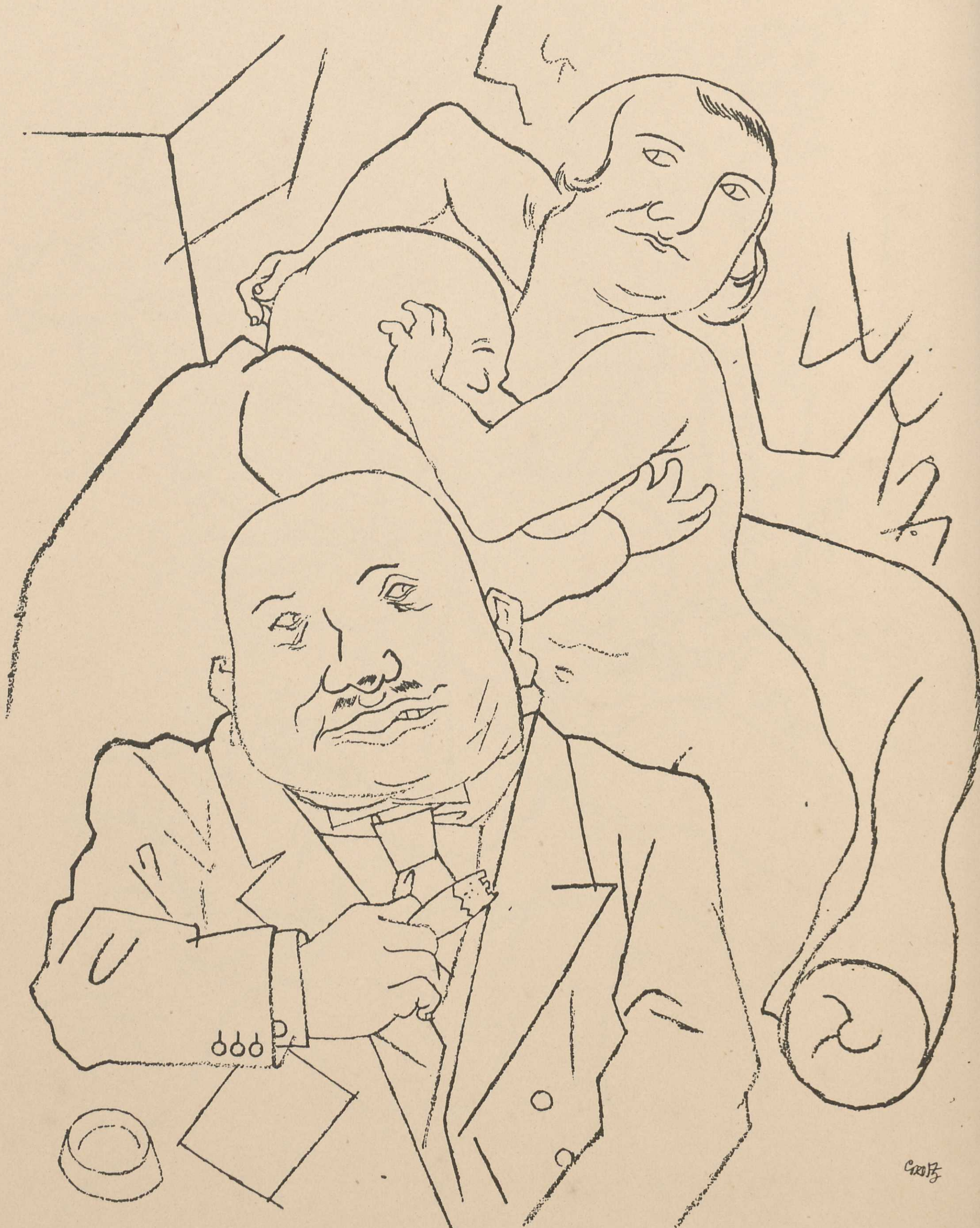


11





13

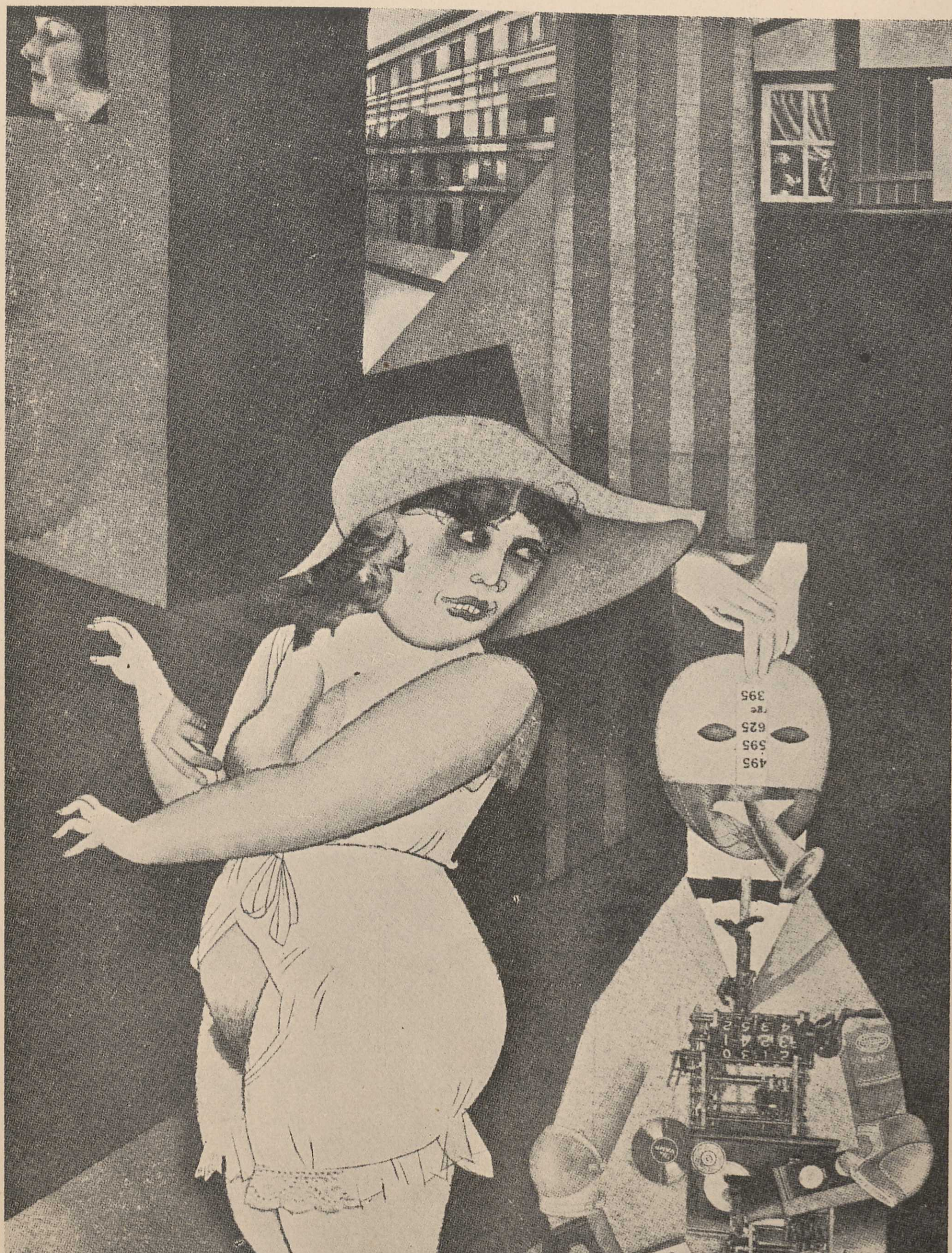

Grosz

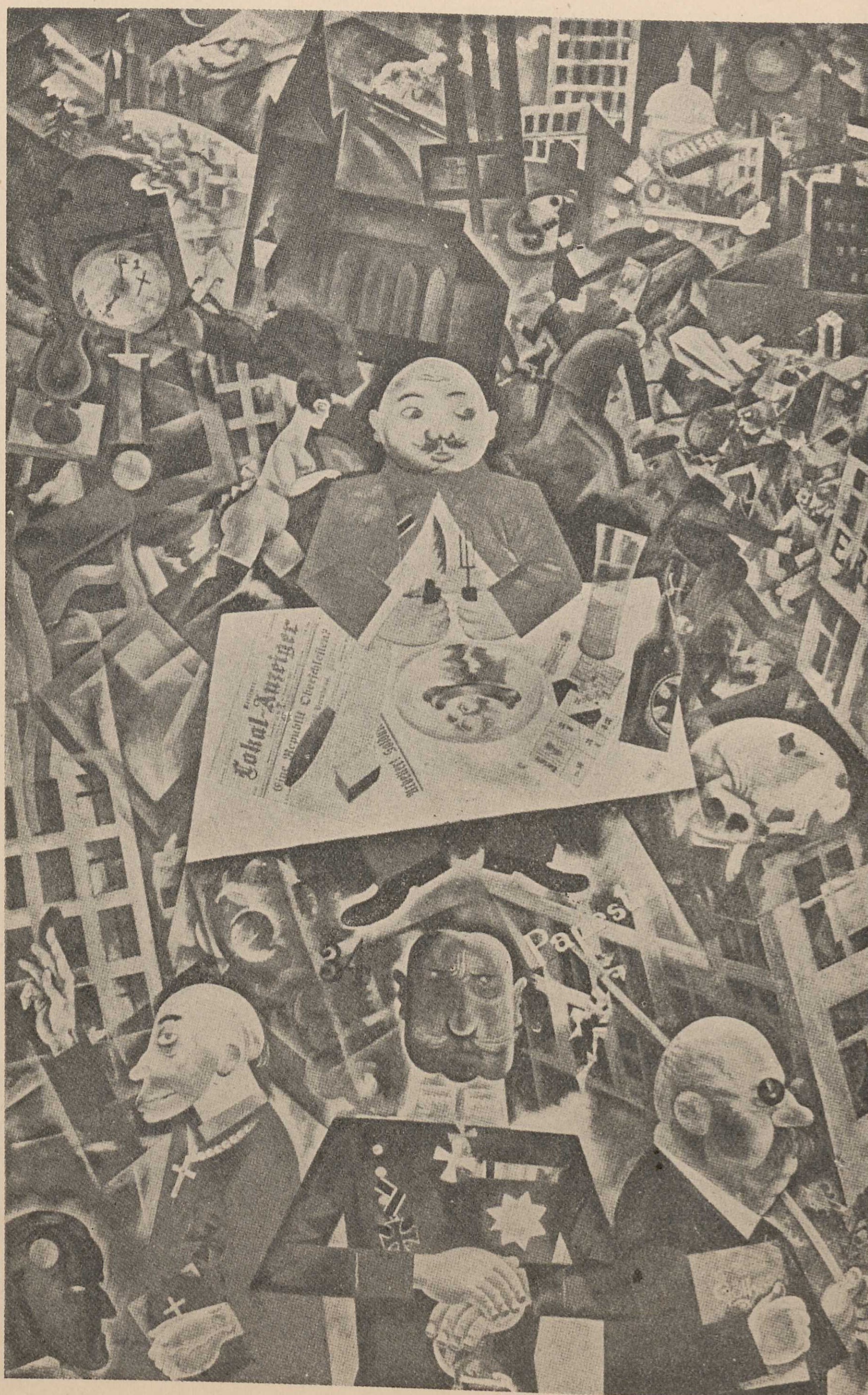




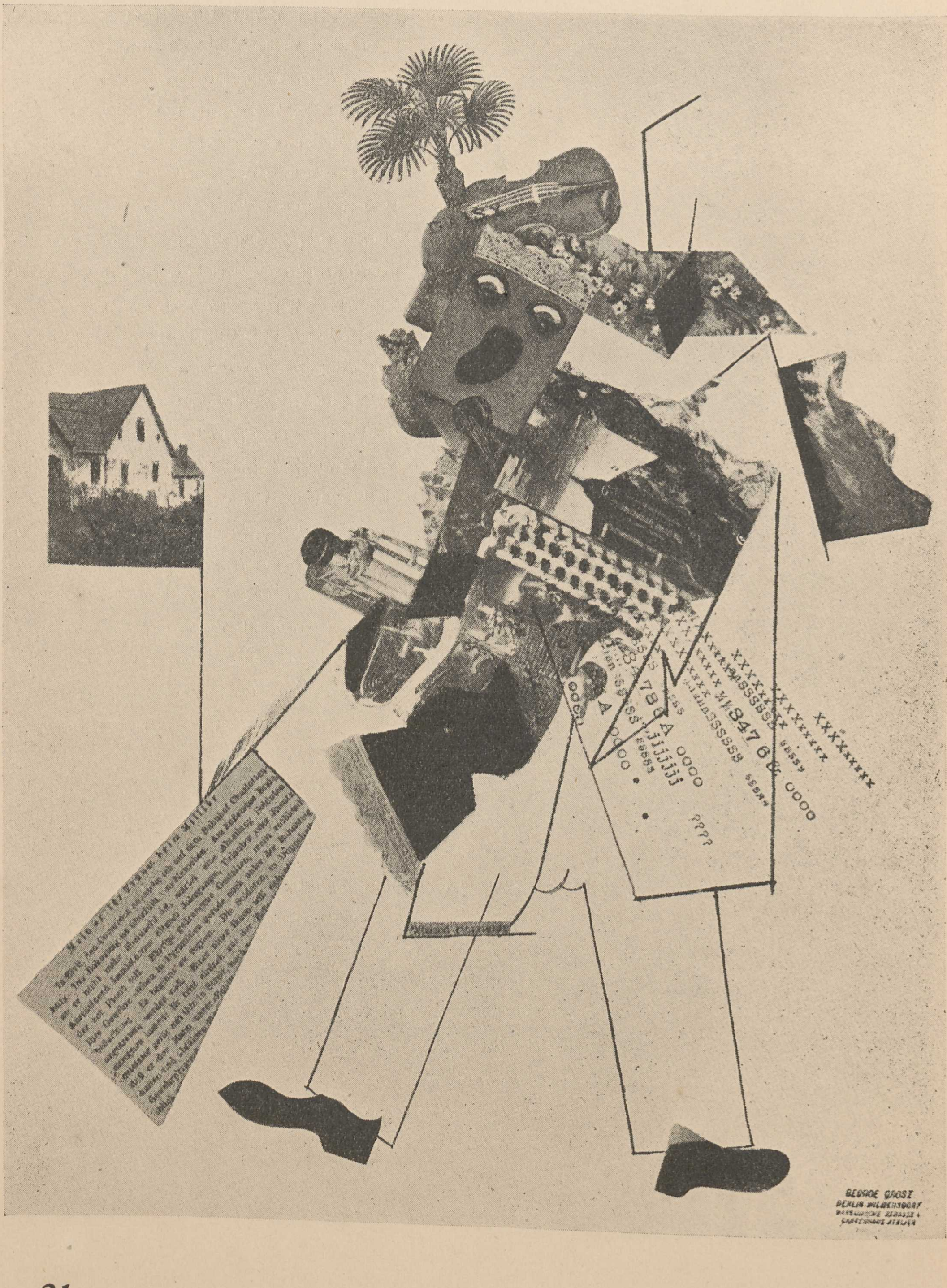


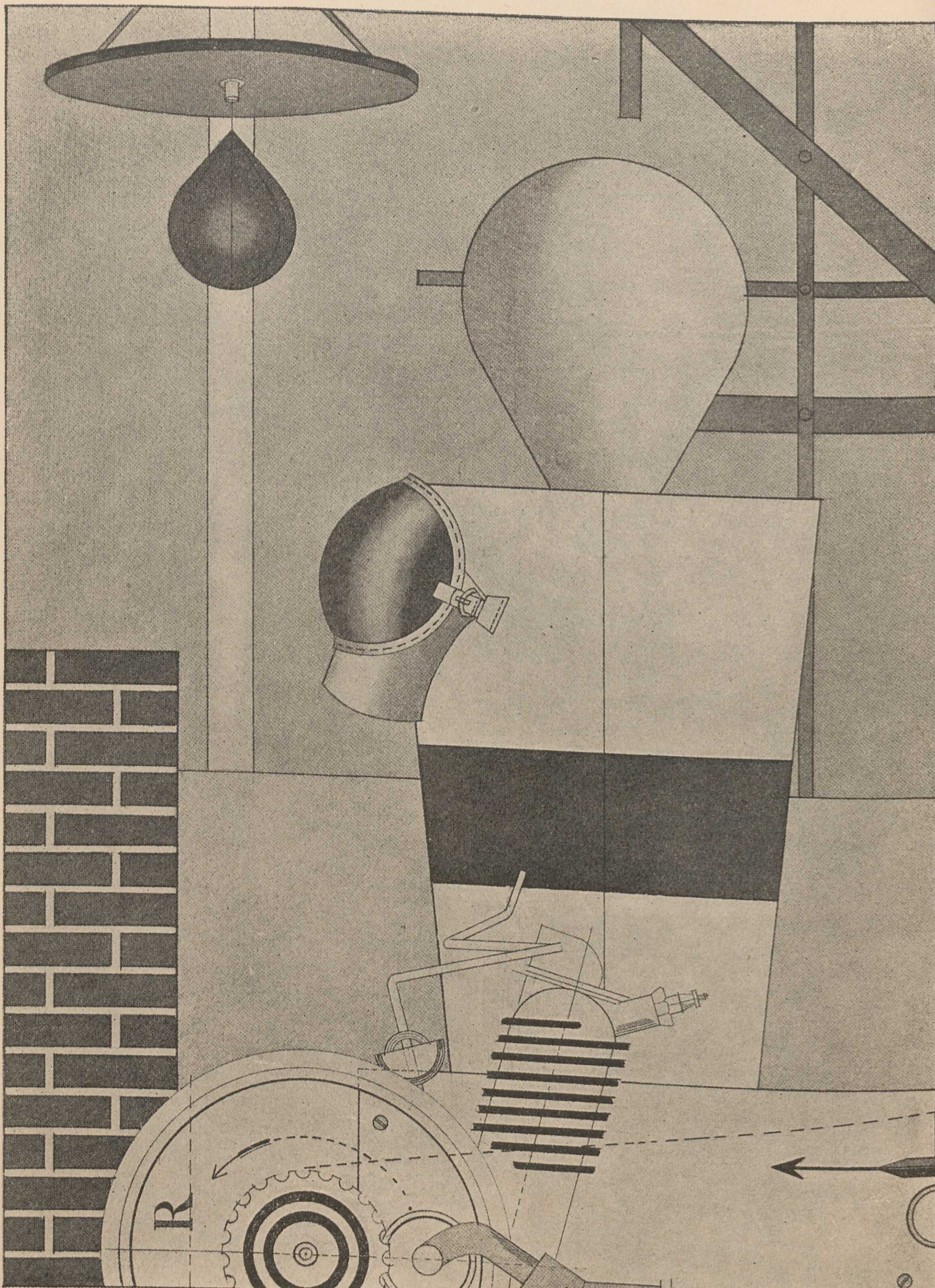
17


No 9
385 YDS

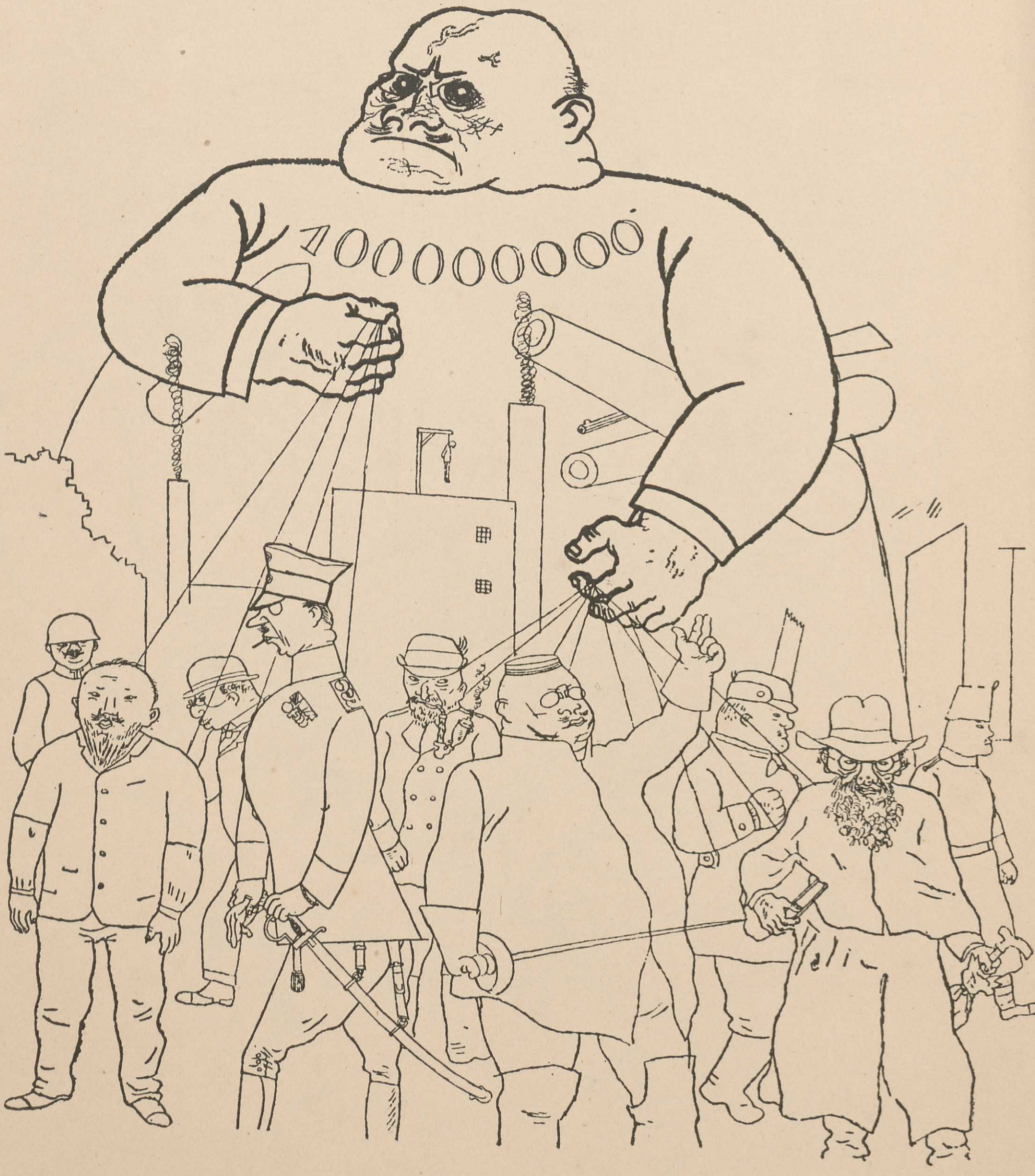

Lokal-Anzeiger


CONSTRUKTÖR
George Grosz//1920
CONSTRUIERT
George Grosz// 1920
CONSTRUKTÖR
Alle Rechte vorbehalten!
Alle Rechte vorbehalt
CONSTRUKTÖR
George Grosz//1920
Lokal-Anzeiger


GEORGE GROSZ
BERLIN WILMERSDORF


R




100000000

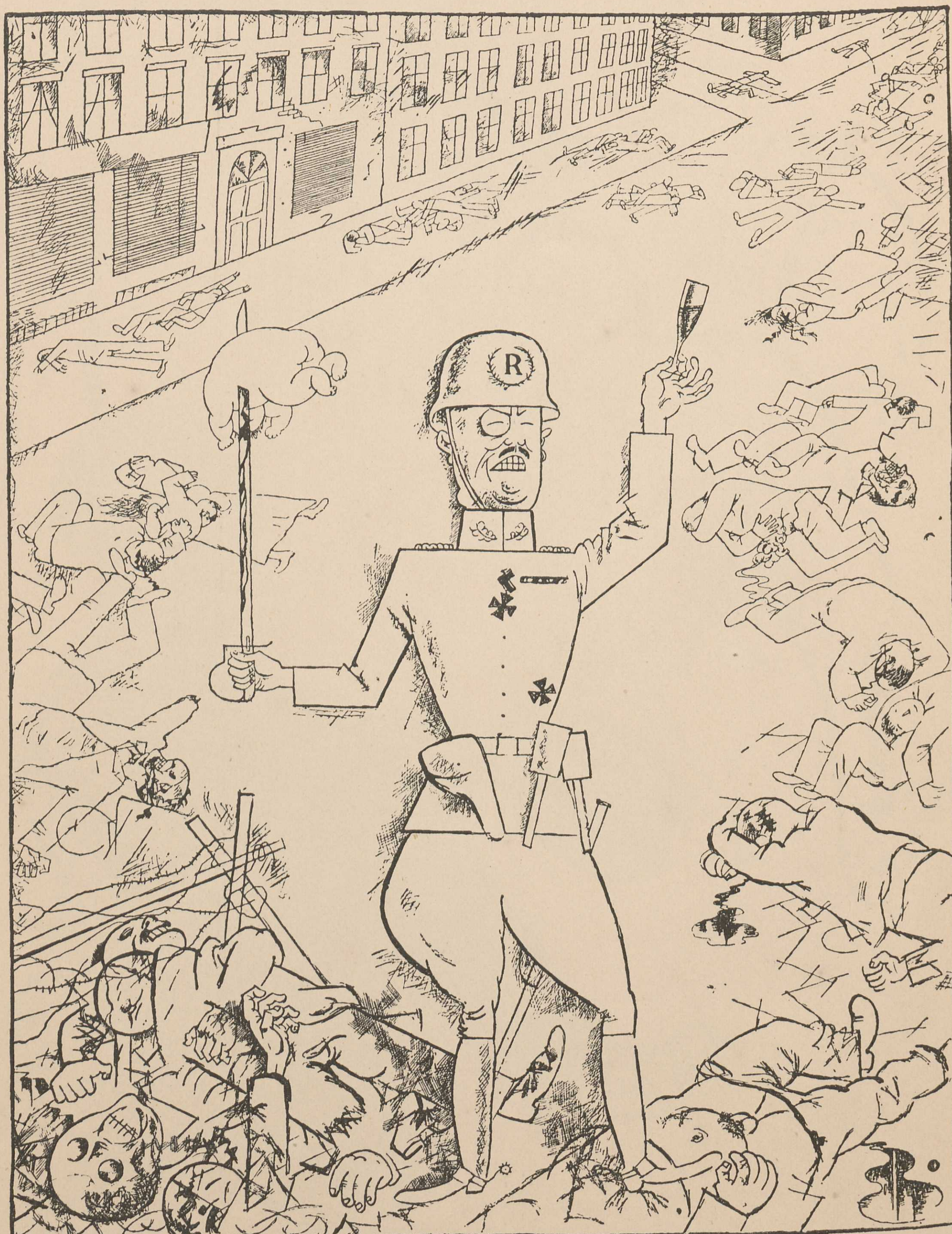

10000
10000
10000
10000
10000


KLASSENJUSTIZ
AKTIE

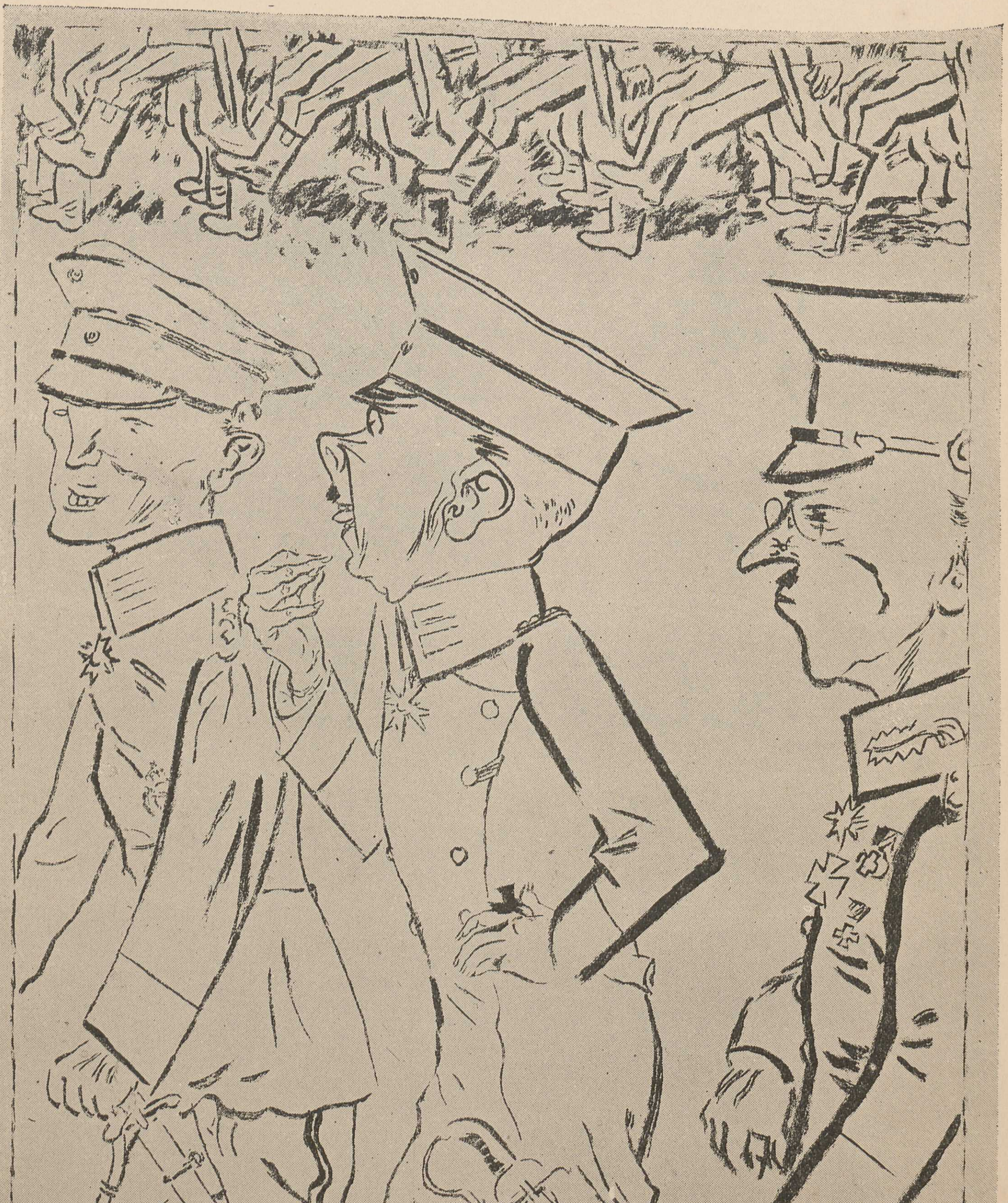









500








Friedens GAS
Kapital

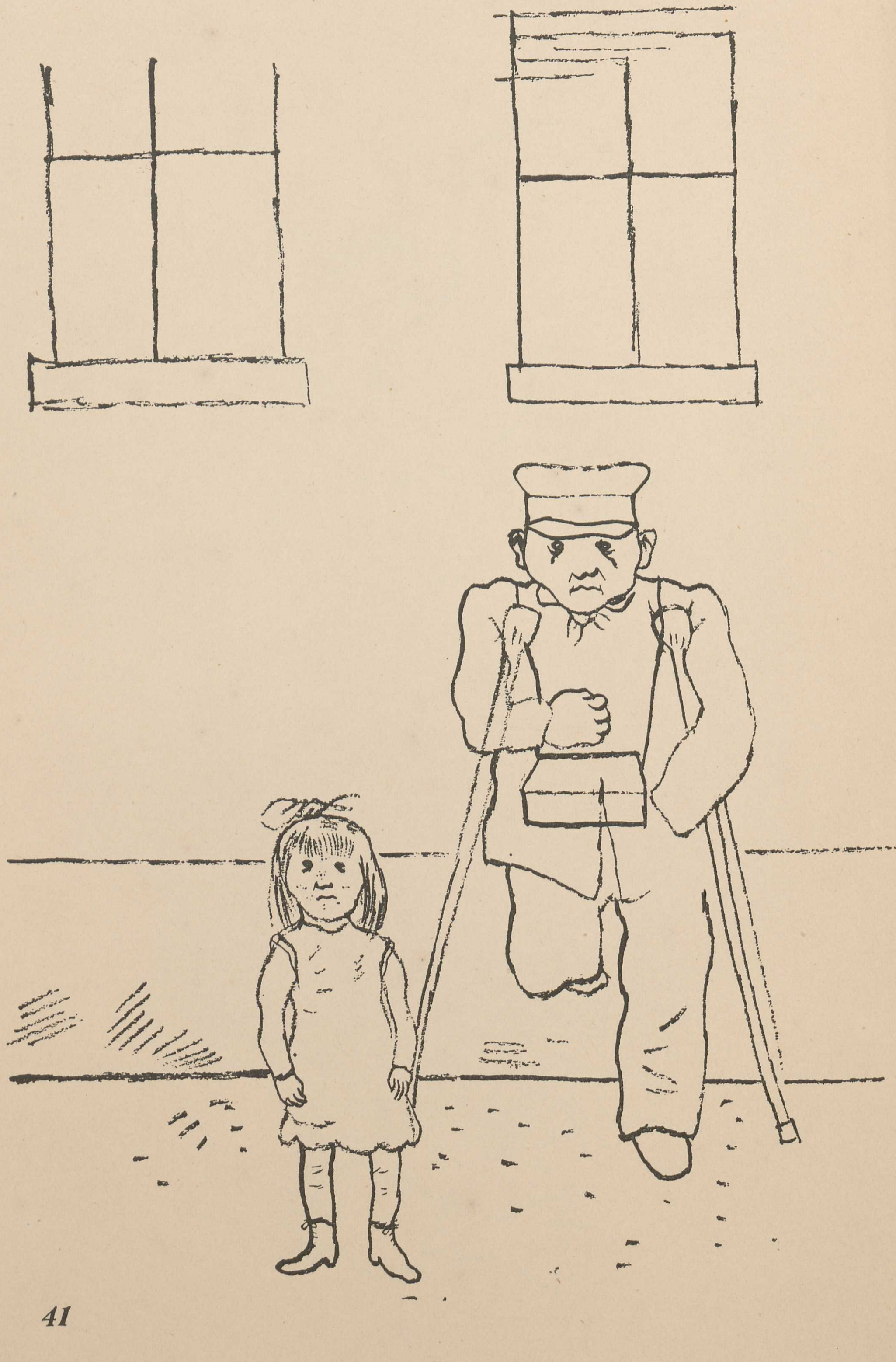

tata-ra
tä-tä
Seid fruchtbar
und mehret Euch



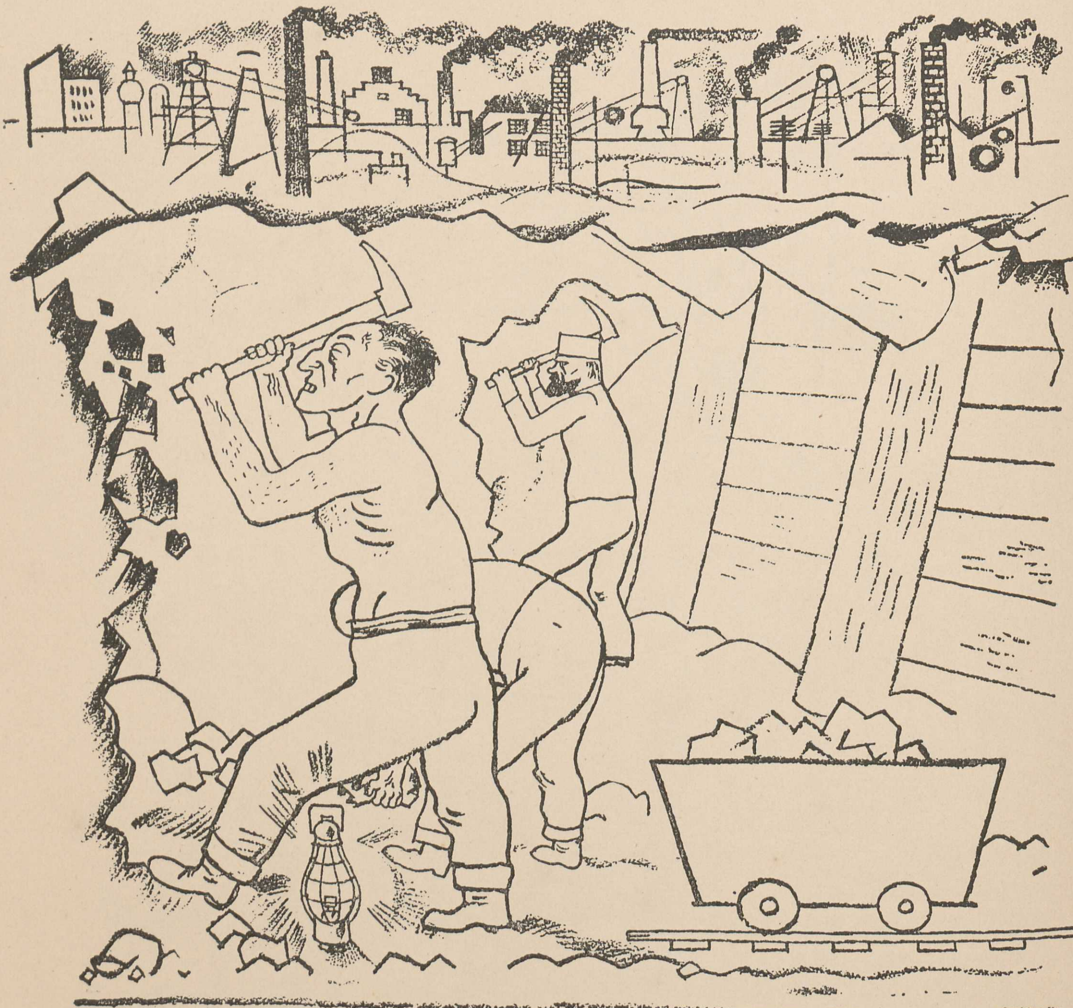

30000
LEVIEN

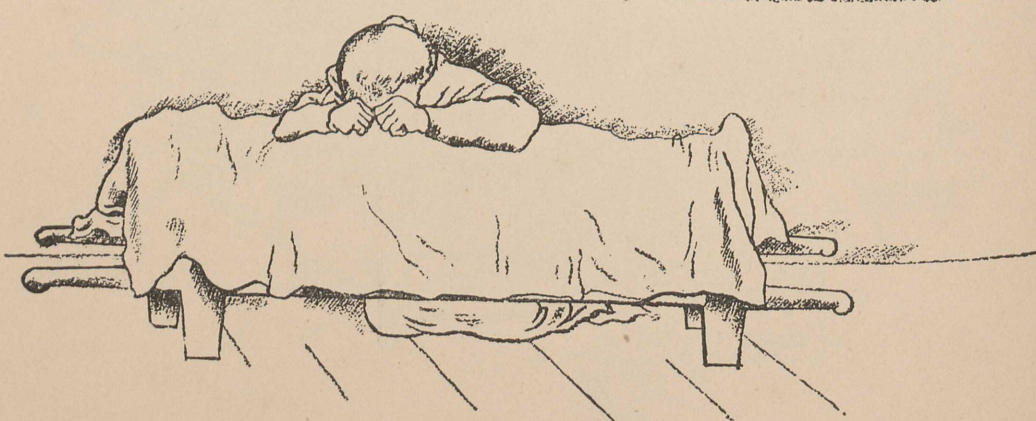


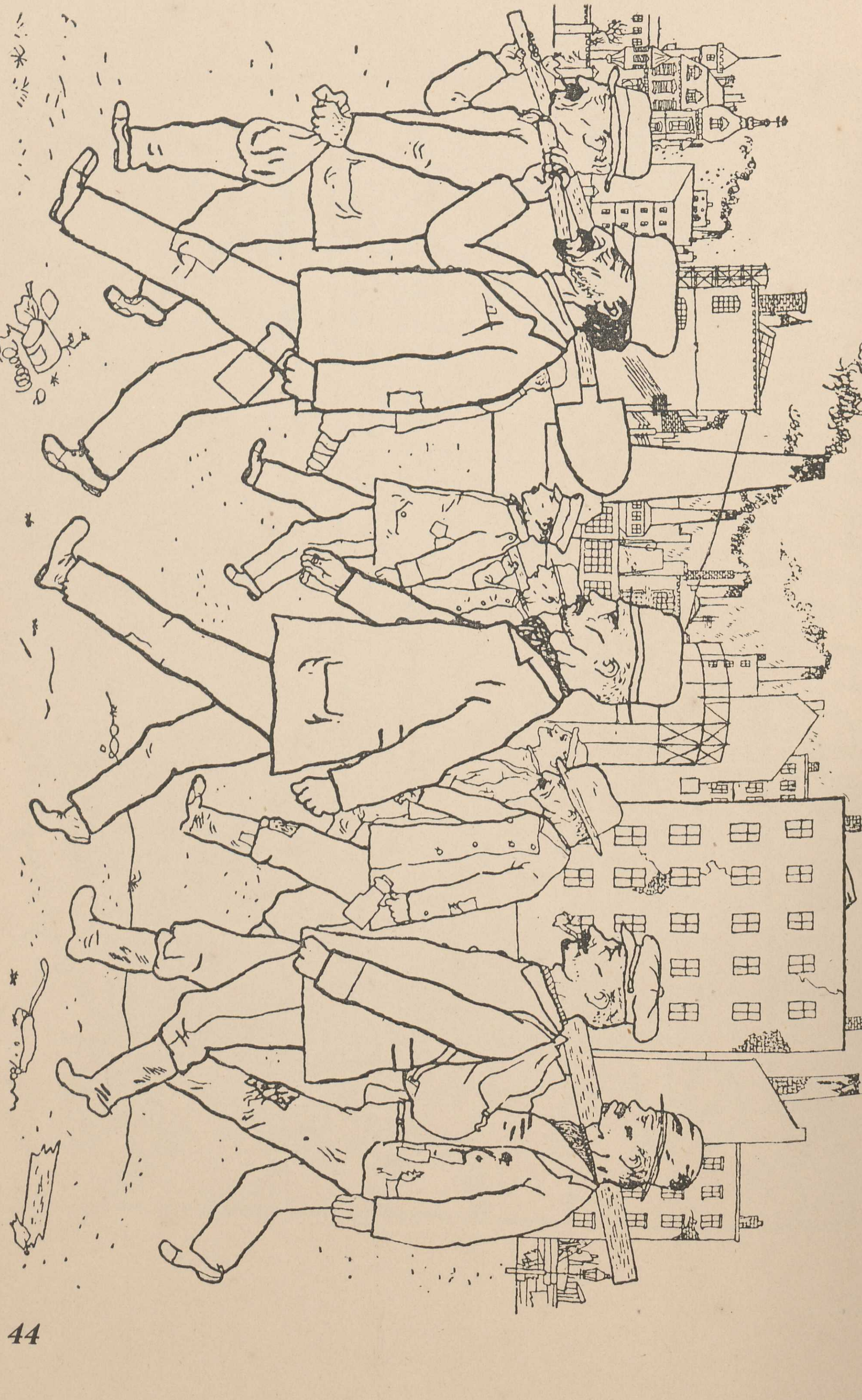


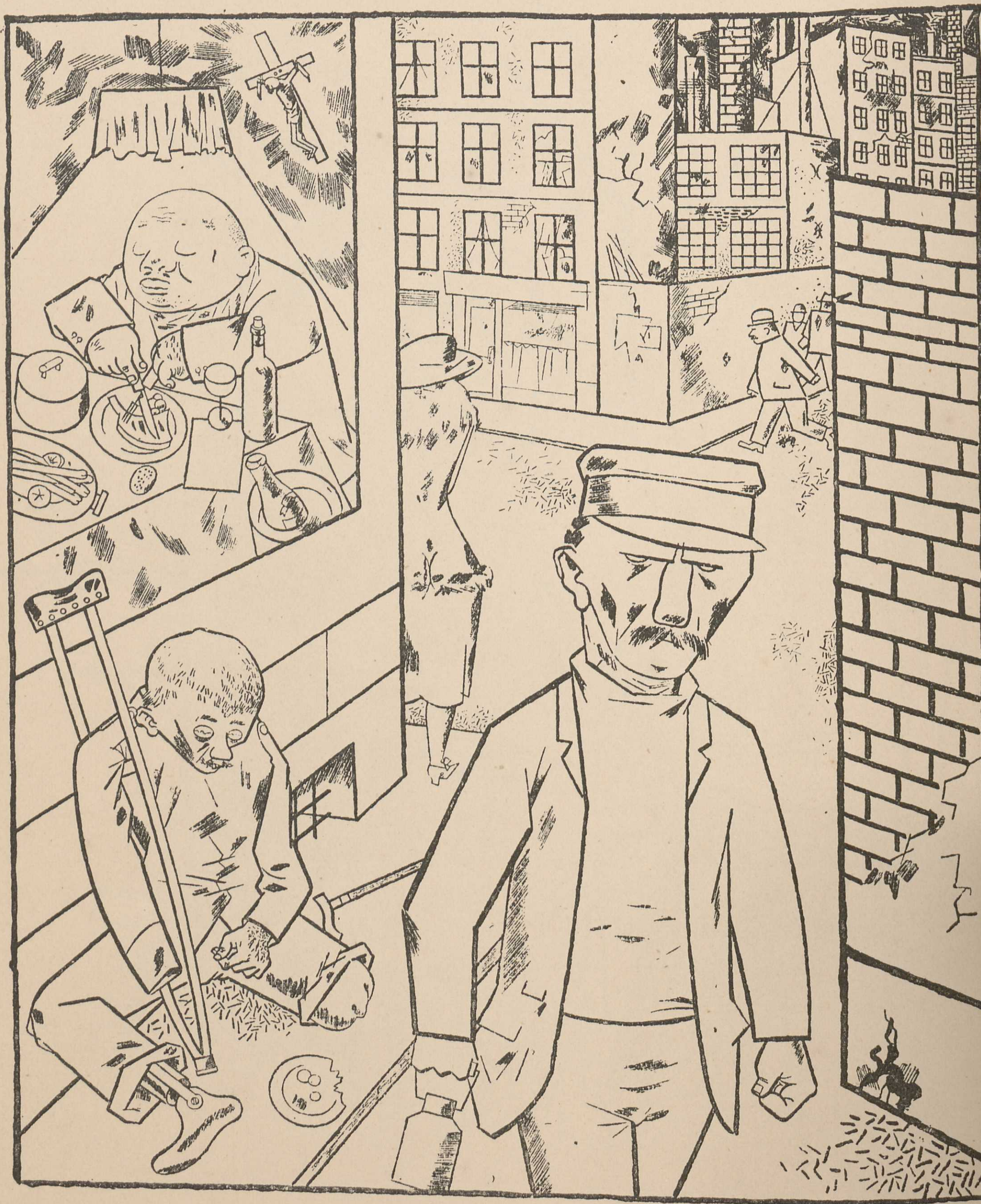




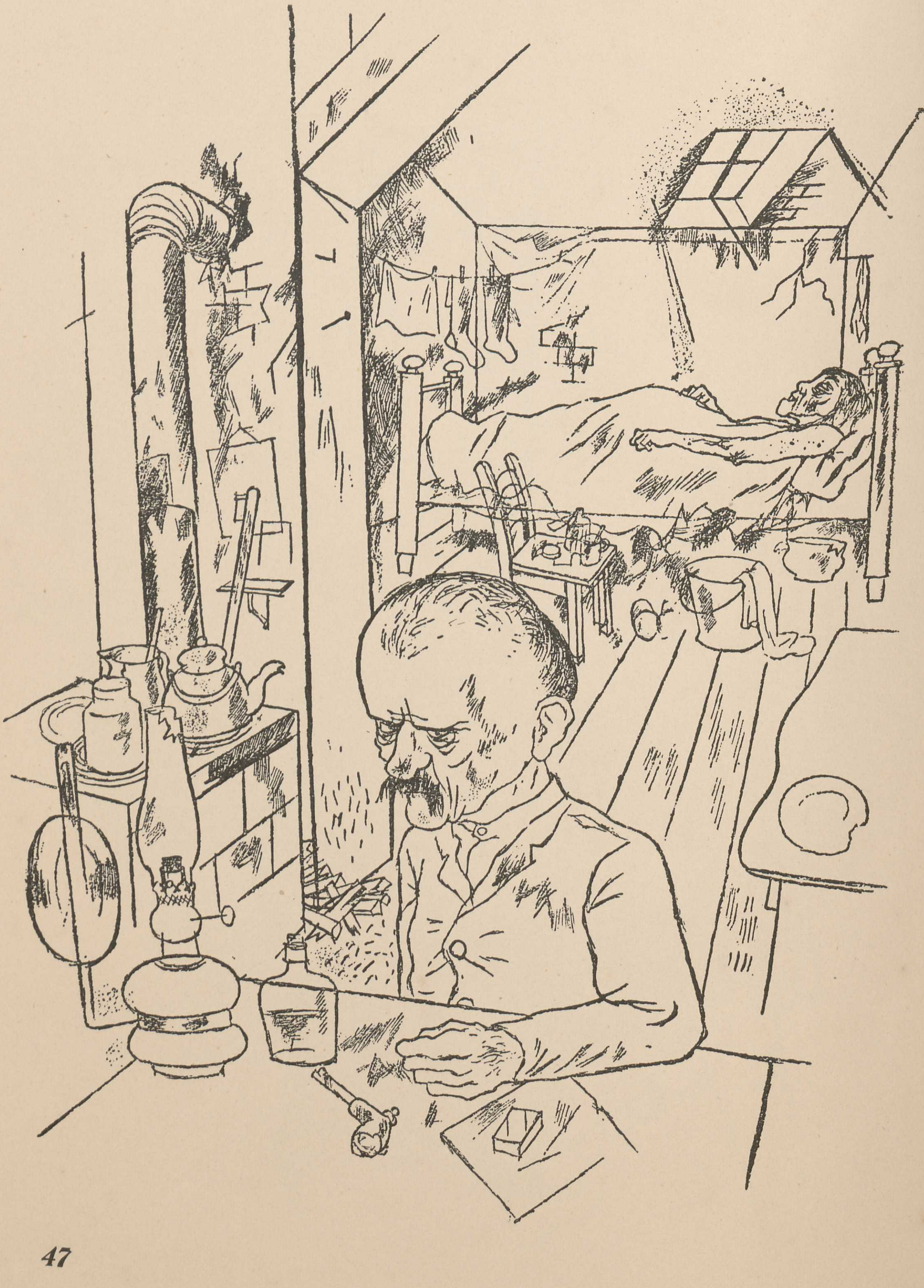












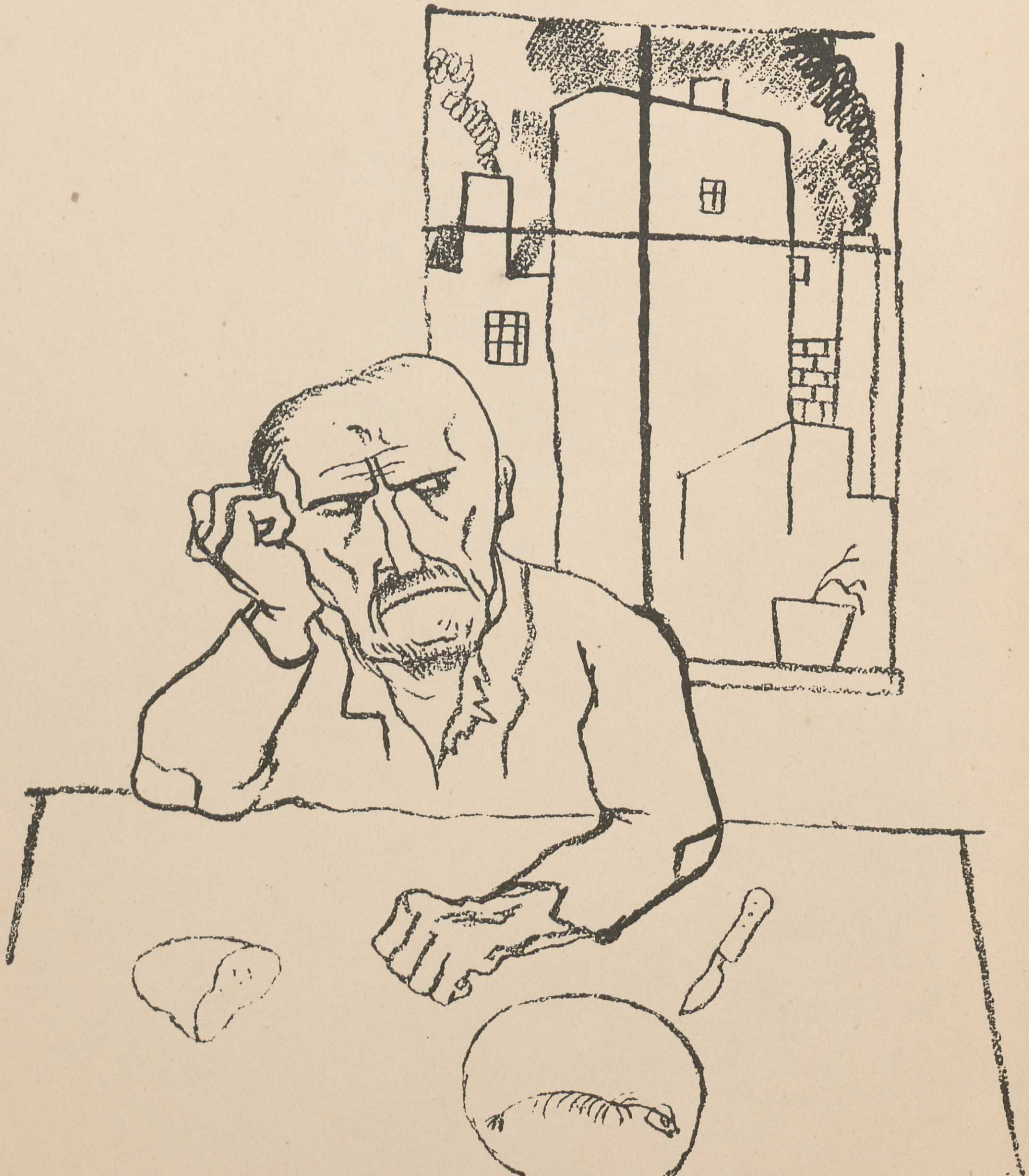
47






Feinkost
Mampe Liquöre



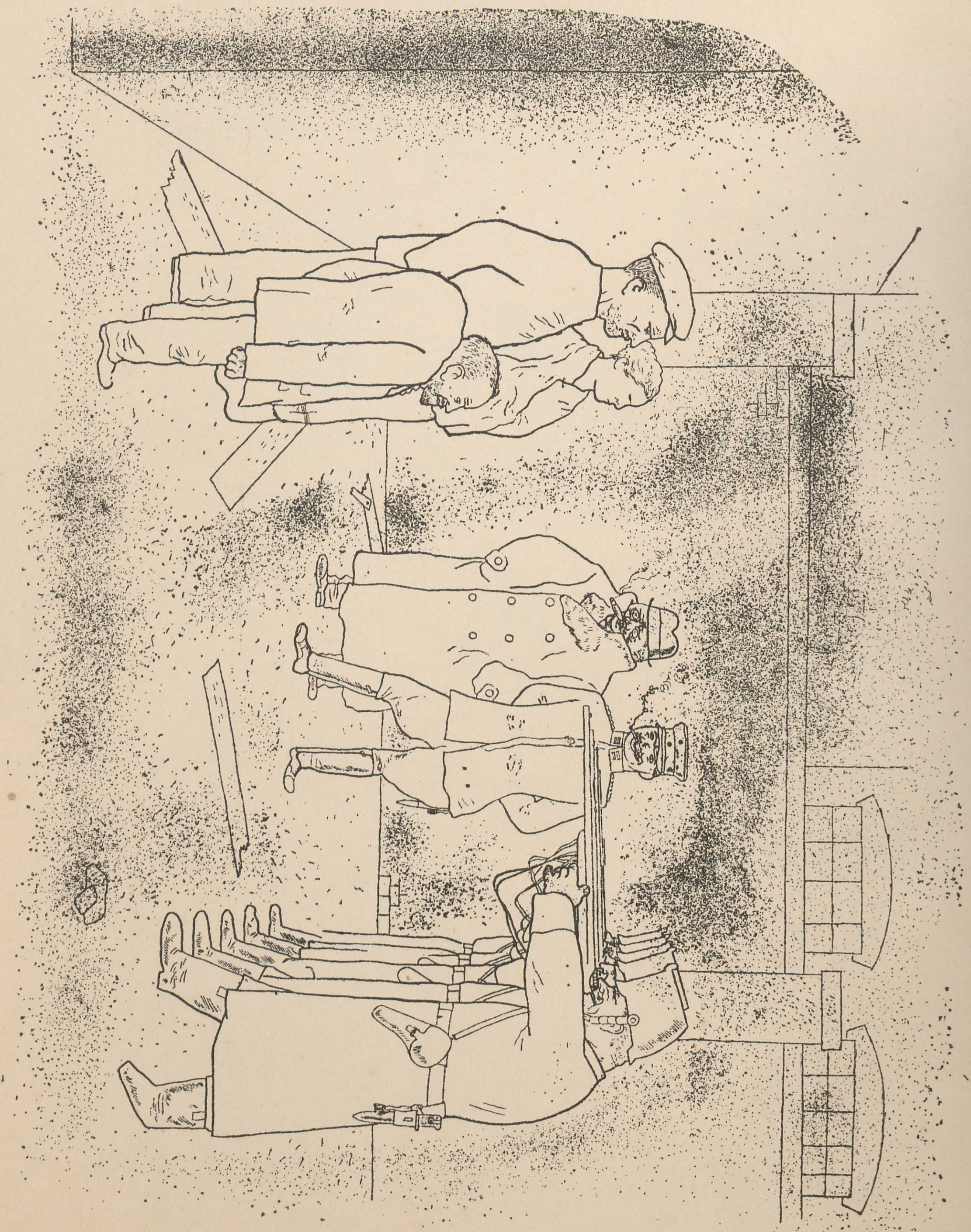


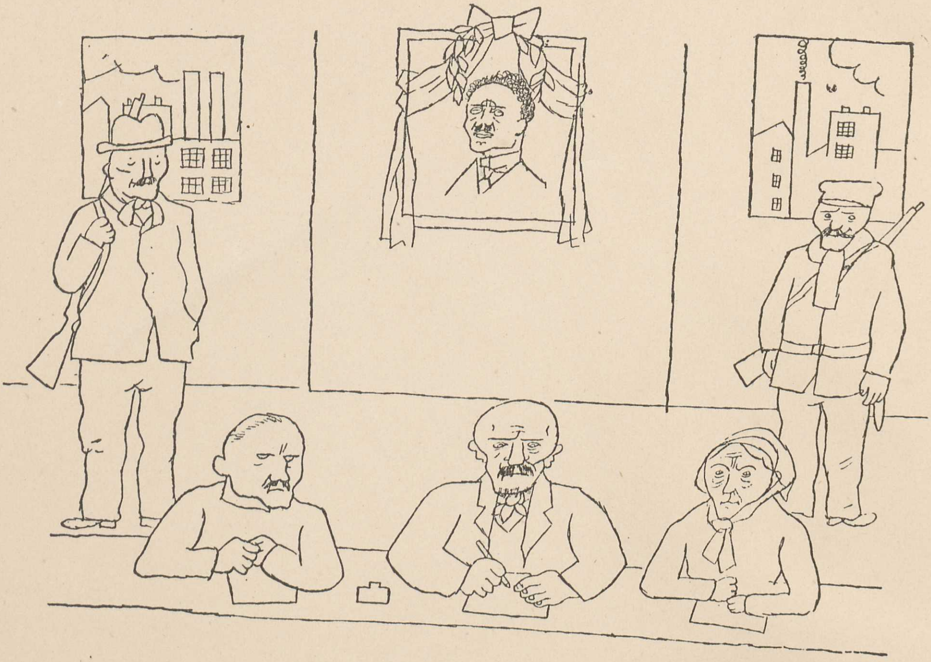


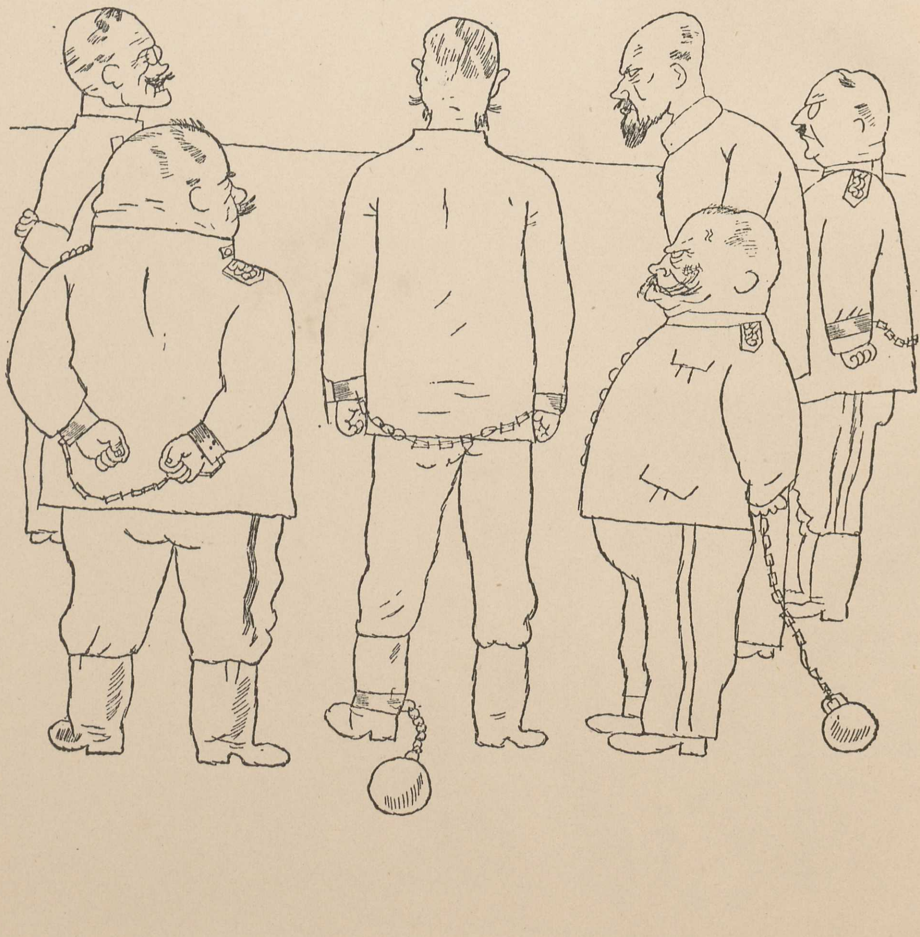












昭和四年十一月十五日印刷
昭和四年十一月廿　日發行

ゲオルゲ・グロッス
定價二圓八十錢

著者　柳瀬正夢

發行人　小林勇
東京神田一ツ橋通九

印刷人　田中末吉
東京牛込山吹町一九八

發行所
東京神田一ツ橋通九
鐵塔書院
振替東京一三七八九
電話九段二七八九

¥280